46
810
A312

42353
教科書文庫
4
810
42-1938
20000
66129

昭和十三年一月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科

改制 女子國文新讀本

千田憲編

東京 右文書院藏版

広島大学
教
66129
図書

資料室
46
810
B812

櫻井驛の訣別　（荒井寛方筆）

「吉野哀史」參照

改制

女子國文新讀本　卷五

目次

一　自然の好愛……芳賀矢一……一
二　順境と逆境……犬養毅……六
三　土……長塚節……一〇
四　木精……森鷗外……一六
五　文章の道……島崎藤村……二四
六　日本新女性の歌……與謝野晶子……二九
七　初夏の京城……尾崎喜八……三三

八　波と船唄……木下杢太郎……四一
九　青蚊帳……貝原益軒……四四
一〇　四時の樂しみ……貝原益軒……四九
一　花ざかり……四九
二　杜鵑……五一
三　端居の風……五三
四　月の色……五四
五　埋火……五六
一一　女性美と競技運動……安田弘嗣……五八
一二　草花の頌……三宅花圃……六一
一三　をさな兒……小林一茶……六五

一四　母と子……今井邦子……六八
一五　私の禮拜……前田晁……七七
一六　登山の意義……田部重治……八一
一七　西穗高へ……黑田初子……八六
一八　山の平和……安倍能成……九六
一九　雷のすし……安樂庵策傳……一〇一
二〇　好晴……一〇四
二一　地震と震災……今村明恒……一〇六
二二　曾我兄弟……一一六
一　空ゆく雁……「曾我物語」……一一六
二　小袖曾我……「觀世流謠曲」……一一九

二三　獨創の國日本……平福百穗……一二八
二四　野村望東尼……下田歌子……一三三
二五　秋窓雜記……北村透谷……一四〇
二六　星の光……山本一清……一四二
二七　吉野哀史……一四五
一　櫻井の訣別……「太平記」……一四五
二　行宮の秋霧……北畠親房……一四九
三　如意輪堂……「太平記」……一五五
附錄
常用漢字表

改制 女子國文新讀本　卷五

一　自然の好愛

芳賀矢一

福井縣の人、國文學者、文學博士、昭和二年歿、年六十一。

我が日本國は、氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季折々の風景は眞にうつくしい。かういふ國土の住民が現生活に執著するのは當然である。四圍の風光の吾等の前に横たはつてゐるものが、すべて笑つてゐる中に、住民がひとり笑はずにはゐられぬ。現世を愛し、この世の生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。この點に於ては、吾々は天の福德を得てゐるといつてよろしい。殊に、日本人が花鳥風月に親しむことは、吾人の生活の何れの方面に於

しろたへ
あらたへ

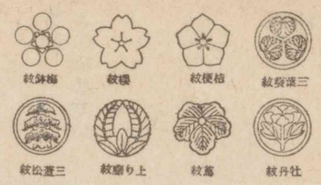
しのぶずり

因む

ても見られる。

上代に於ける衣食住は、多くは、我が國に繁茂してゐた植物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤葛を以てくゝりつけ、楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれを染め、蔓草を取つてたすきとした。日本の女の子の著物の模樣のはでやかなことは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ綺麗である。それが、やがて衣服にもうつつて來るのである。昔のしのぶずりも、今の裾模樣も、つまり同じことである。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染めだした友禪縮緬、襦珍の帶から下駄の鼻緒のさきまで、草木の模樣で飾つてある。色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色など澤山ある。中古の女裝束の櫻重ね・梅重ね・山吹重ね等も、四季折々の花に因んだのであつた。やさしい女流のは當然ともい

指物



什器

はうが、武士の戰爭に出立つ甲冑にも、小櫻縅・卯花縅・澤瀉縅などいふのがある。いかにも優美ではないか。又、旗や指物に、蝶や笹龍膽や澤瀉をつける。皇室の御紋も菊・桐で、德川家のは葵である。今日の家々の定紋にも、桔梗・櫻・梅鉢・牡丹・蔦・藤・松の類が最も多い。それから食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅・牡丹餅を始として、菓子屋の目錄を一見すれば、一層その多いことがわかる。形も、花木に取るのが多い。菓子には別して多い。汁粉には十二ヶ月の雅名があり、酒にも櫻正宗・菊正宗がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ゐられ、魚類の料理にも植物を用ゐ、牡丹餅を贈るには重箱に南天の葉をしく。その他、庭園の構造でも、室内の裝飾・什器でも、家屋の建築でも、すべて植物を用ゐ、自然のまゝの趣味を有してゐる。挿花の術、箱庭作、繪畫など、皆我が國人獨得の伎倆で、特殊の發達をしてゐる。すべて、花を活けるに

戰記　謠曲　淨瑠璃　點綴　精彩　季

も、これを畫くにも、その生きたまゝ自然のまゝにするのが美しいのである。枝を切りとつて花ばかり花瓶に挿込むのは、西洋の風であるが、自然の幹枝をそのまゝに、天地の配合をよろしく現すのが、活花でも盆栽でも、日本人のこのみである。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

我が國の文學に、自然を吟咏したものの多いことは、いふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つてゐることや、彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が國の文學が自然美を歌ふを長所とすることがわかる。眞に、上古から近世までの歌題の大半は、花鳥風月である。戰記・謠曲・淨瑠璃なども敍景の文を點綴して精彩を生ずる。俳句に至つては、季のないものは句にならぬことになつてゐるのである。

ものゝあはれ　要素

凡そ、四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことがない。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、卽ちあはれを知ることである。源義家や源三位頼政や平忠度等の、日本武士として優にやさしく感ぜられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからである。頼朝も尊氏も秀吉も太田道灌も暇あるときには、風流の技を翫んだ。日本の武士道は、自然の美を愛し、もののあはれを解することを一つの要素とする。英雄豪傑ばかりではない。日本人ほど國民全體にあはれを知つてゐる、卽ち、詩人的な國民は、恐らく世界中にまたとあるまい。歌心は誰でもある。歌は作らぬまでも、俳句を作る。上手でなくとも、何人も作つて、花見遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、詩人的國民はまことに遊事に忙がしいのである。

—（國民性十論）—

犬養　毅　岡山縣の人、政治家、昭和七年歿、年七十八。

二　順境と逆境

犬養　毅

犬養　毅

順境とか逆境とか貧富とかいふことは、人に依つて痛く之を苦にするものと、然らざるものとあるが、これは其の人の立志の程度如何に依つて苦樂の別が生ずるのである。順境とか逆境とかいふのは、他から見て名づけるのであつて、譬へば空を翔ける鳥から觀れば、冷たき水中に棲息する魚を指して逆境といふであらうが、魚は空飛ぶ鳥を逆境と觀るかも知れない。自分みづからが所謂順境を樂しいと思はず、所謂逆境を苦しいと思はぬ人に取つては、順境もなければ、逆境もないのである。

邁進　嶮岨

朱子　名は熹、字は元晦、南宋の大儒。（西暦一一三〇―二二〇〇）

陽明　本名は王守仁、字は伯安、明の哲學者。（西暦一四七二―一五二八）

凡そ人間一代の事業として、先づ目的を定めなければならぬ。卽ち志を立てるのである。さて一旦志を立てて前途の目標に向つて進み往く間には、山坂もあれば、谷川もある。風もあれば、雨もあるが、既に目的を定めてそれに向つて邁進する時の心には、嶮岨に遇うても困難を感じない。中間の艱難を打破ることも亦興味の一つとして、少しも苦しいとは感ぜぬのである。故に艱難の生涯を送り來たつた人に對つて其の經歷談を聽いて見ると、本人は一向苦しいとも何とも思はないで經過し來たつた人が多數である。して見ると、順境とか逆境とか貧富とかいふことを苦にするとせぬとは畢竟目的が定つて居るか居ないかにある。立志の堅きものがあるかないかの別である。されば、孔子も立志を第一に置かれて居るが、朱子*でも陽明*でも、立志に重きを置

念頭

痩我慢

相對的

くのは此の譯である。既に立志の確乎たるものがあれば、順逆貧富などは念頭に浮ぶべき筈がない。然るに境遇の苦痛を感ずるやうでは、まだまだ立志が堅くないのである。

自分の經驗からいつても、多年の間世の所謂逆境に居るのであるが、自分は未だ曾て人の思ふ如く苦痛を感じたことはない。自分の家族も苦痛とは思はぬやうである。これは決して痩我慢でいふのではない。家の主人が確乎たる目的を定めて、一心不亂に邁進する場合には、家族も自然と其の感化を受けるから、苦を苦とせざるやうになるのである。つまり貧富順逆は相對的である。三井・岩崎の如き富豪でも、それ以上の大富豪に較べれば貧乏といへる。吾輩の如き貧乏人でも貧民窟に入れば富豪の部類になる。只食無く衣無く、生存が出來ぬまでの極端の境涯を除くの外は、心の持ちかた次第で苦にもなり樂にもなる。

邊幅を修飾す

出處進退

助因

貧富は、其の人の職分に依つて、恥となるもあり、恥とならぬもある。商人が、金を作ることを目的としながら、金を作る能はずして貧乏して居るのは、意氣地がないのである。宗教家・學者の如き金を作る目的でない者は、貧乏は恥辱ではない。

但し、逆境に堪へ得るのは家庭の質素が第一である。生活が質素でなくては、長い籠城の出來るものではない。一點邊幅を修飾する心があつたらだめである。一點虛榮の心があつたらだめである。從來知名の人々にて、出處進退を過つた助因は、多く生計問題から來て居るが、生計の困難を招いた原因は、家庭の質素を缺いた所より來て居るのである。若し生計費が少なくて濟むならば、何年籠城しても差支へぬから、「武士は食はねど高楊枝」で居ることが出來る。

—（木堂談叢）—

長塚　節
茨城縣の人、歌人、小説家、大正四年歿、年三十七。

三　土

長塚　節

春は空から、さうして土から、微かに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風が、どうかするとはたと止つて、空際にはふわ〳〵とした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、動きもせずじつとしてゐることがある。水に近い濕つた土が暖かい日光を思ふ一杯に吸うて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛*の木の地味な蕾は、目に立たぬ間に、少しづつ延びて、ひら〳〵と動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の狀態にありながら、稀にはそつちでもこつちでもくゝくゝと鳴きだすことがある。空から射す日の光はそろ〳〵と熱度を增して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土はすべてを段々と

擡ぐ
假死
復活

刺戟して、堀の邊には、蘆や、とだしばや、その他の草が空と相映じてすつきりとその首を擡げる。軟かさに滿たされた空氣を、更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら〳〵と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒き散らしてゐる。蛙は假死の狀態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな樣子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騷がしい聲は只空にのみ響いて快げである。

長塚　節

彼等は更に春の到つたことを、一切の生物に告げる。草や木が心づいて、その活力を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴く

嫩葉

ためらふ

ことを止めまいと力める。

田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分が先に嫩葉の姿に成つて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かでかつ朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらうてゐる周圍の林を見る。

岬のやうな形に偃うてゐる水田を抱へて、周圍の林は漸くその本性のまにまに、勝手に白つぽいのや、黄色つぽいのや、種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑になるのである。

雜木林のそこらこゝらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、はづかしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雜木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて春がふけたと喚びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、その囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んで畢ふ。

煌めく

さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうに、その身を遙かに煌めく日の光の中に沒して、その小さな喉の拗ぢきれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。

爪だつ

蛙は愈〻益〻鳴きほこつて、樫の木のやうな大きな常緑木の古葉をも、一時にからりと落させねば止むまいとする。

この時すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地についてゐたすべての雜草が、爪だちして只空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつとひきとめて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。

撼がす　紆絲　聲を呑む　ぎろ

冬の間は土と平行することを好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼がしながら、殊更に鳴きたてる。

白い絃絲のやうな雨は、水が田に滿つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し引返し働いて居る人々の周圍に、足下に迫つて、敏捷にその手を動かせ動かせと促して止まぬ。

蛙がぴつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更に蛙はひつそりと靜かな夜になると、いかにも自分の聲が遠くかつ遙かに響くかを矜るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙

擽ろ　消耗　覺醒　あさまし

の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擽つて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。

彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、その覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を喚返すのである。

草木は、遠く遙かに響けと鳴くその聲に搖られつゝ、夜の間に成長する。櫟や楢やその他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴き止む季節までは、いくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには毛蟲やその他のあさましい損害が或はあるにしても、しと〳〵と屢〻梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い綠が地上を掩うて、爽かな涼しい陰を作るのである。

—(土)—

森鷗外
名は林太郎、島根縣の人、文學博士、醫學博士、陸軍軍醫總監、大正十一年歿、年六十一。

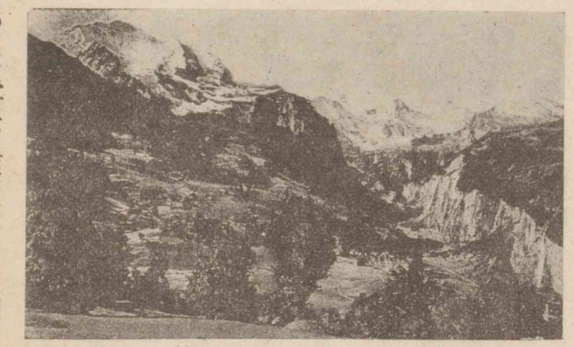
深山薄雪草
ブロンド

四　木精

森鷗外

巖が屏風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見つけて喜ぶのは、こゝの谷間である。フランツはいつもこゝへ來てハルロオと呼ぶ。麻のやうなブロンドの頭を振立てて、高音でハルロオと呼ぶのである。呼んでしまつて、じいつとして待つてゐる。暫くすると、大きい鈍い最低音で、ハルロオと答へる。これが木精である。

フランツはなんにも知らない。唯暖かい野の朝、雲雀が飛立つて鳴くやうに、冷たい叢の夕、蟋蟀が忍びやかに鳴くやうに、ここへ來てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれるのが嬉しい。木精に答へて貰ふために呼ぶのではない。呼べば、答へるのが當り前である。日の明るく照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落すために立つてゐるのではない。立つてゐれば、影がさすのが當り前である。そしてその當り前のことが嬉しいのである。



フランツは、父が麓の町から始めて小さい沓を買つて來て穿かせてくれた時から、こゝへ來てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答へないことはない。

フランツはだんだん大きくなつた。そして父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間、例の巖の前へ來ずにゐた。

或日の朝である。山を一面に包んでゐた雪が巔にだけ殘つて、方々の樅の木立が綠の色を現して、深

さび
次高音

い深い谷川の底を水がごうごうと鳴つて流れる頃のことである。フランツは久しぶりで例の巖の前に來た。そして例のやうにハルロオと呼んだ。麻のやうなブロンドの頭を振立てて呼んだ。併し聲は少し「さび」を帶びた次高音になつてゐるのである。呼んで了つて、じいつとして待つてゐる。暫くして、もう木精が答へる頃だなと思ふのに、山はひつそりして、なんにも聞えない。唯深い深い谷川がごうごうと鳴つてゐるばかりである。

フランツは、久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くじいつとして待つてゐた。木精はやはり答へない。

フランツはじいつとして、いつまでも待つてゐる。木精はいつまでも答へない。

麻痺

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈はない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。フランツは前より大きい聲をしてハルロオと呼んだ。そして又じいつとして待つてゐる。もう答へる筈だと思ふ時間が經つ。山はひつそりしてゐて、ごうごうといふ谷川の音がするばかりである。

又前に待つたほどの時間が經つ。聞えるものは谷川の音ばかりである。

これまでは、フランツは唯不思議だ不思議だと思つてゐたばかりであつたが、この時になつて、急に何ともいへないほど心細く寂しくなつた。譬へば、これまで自由に動かすことの出來た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツ

の頭に觸れたのである。フランツは、麻のやうなブロンドの髪が一本一本逆さまに立つやうな心持がして、見るともなしに身のまはりを見廻した。目に觸れるほどのものに、なんの變つたこともない。目の前には例の巖が屏風の樣に立つてゐる。日の光がところどころ霧の幕を穿つて、樅の木立を現してゐる。風の少しもない日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えてゐた樅の木立が又隱れる。谷川の音の鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牡牛の頸に懸けてある鈴であらう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいつと考へてゐる。餘り不思議なので、夢ではないかとも思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。暫くしてフランツは、何か思ひ附いたといふやうな風で、「木精は死んだのだ。」と呟いた。そしてぼんやり自分の住んでゐる村の方へ引返した。

呟く

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精のことが氣に掛つてならないので、又例の巖の處へ出掛けた。

この日、丁度午後から極く輕い風が吹いて、高い處にも、低い處にもまろがつてゐた雲が、少しづつ動き出した。そして銀色に光る山の巔が、一つ二つ見えて來た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巔といふ巔が、藍色に晴渡つた空にはつきりと描かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帶びた紅に匂ふのである。

まろがる

紅に匂ふ

フランツが例の巖の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑やかに聞えた。小さい時から聞馴れた、大きい鈍い最低音の木精の聲である。フランツは「おや、木精だ。」と、覺えず耳を敧てた。そして何を考へる隙もなく駈出した。例の巖の處に子供の集つてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリューネットの髪を

ブリューネット

してゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。フランツはつひぞ見たことのない子供の群を見て、氣がねをして立止つた。

子供達は皆じいつとして、木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んで了ふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。

勇ましい底力のある聲である。

暫くすると、木精が答へた。大きい大きい聲である。山々に響き、谷々に響く。空に聳えてゐる山々の巔は、この時鮮かな紅に染る。そしてあちこちにある樅の木立は、次第に濃くなる鼠色に浸されて行く。知らぬ七人の子供達は皆じいつとして、木精の聲尻が微かになつて消えて了ふまで聞いてゐる。どの子の顏にも喜びの色が輝いてゐる。その色は生の色である。群を離れて、やはりじいつとして聞いてゐるフランツの顏にも喜びが閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

フランツは何と思つてか、そのまゝ踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんなことを考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達が、そこに住んでゐるといふことだ。あれは大方その村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないで、木精が死んだかと思つたのは間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。今度呼んで見たら答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、たうとう闇に包まれて了つた。村の家にちらほら燈火が點き始めた。

—（鷗外全集）—

島崎藤村　名は春樹、長野縣の人、詩人、創作家、明治五年生。

隅田川　東京市の東方を流るゝ川、その上流を荒川といふ。

優に

五　文章の道

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場に通ふ中には、むかうの河岸まで泳ぎ越すことが出來た。更に又一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃にはよくも分らなかつた瀬の早い遲いも分つて來たし、淡水と潮水の雜り合つたあの川の中の冷たい處と、溫い處とも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の樣子を、泳ぎながらに見ることも出來るやうになつた。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を横切つて往復することが出來た。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し

小諸　長野縣北佐久郡小諸町。

曲直

得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは、なか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人を見れば、全く感歎して了つた。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまで行くことは決して困難でないに相違ない。

信州の小諸にゐた時分、私は弓の稽古をしたことがある。誰でも、最初の中は、的に向つて矢を中てることばかりを心掛ける。「唯中りさへすればいゝ。」かう思ふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴む所もなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に中つた矢は、徒らに煩い高慢な「熟練」を思はせるばか

一手揃

焦心

りだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場に來た。その老人は、先づ「姿勢」を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃で同じ場所に行くやうになつた。

是は文章の道にも當てはめて見ることが出來る。唯好い文章ばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思へば、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地均をした。葱の苗や馬鈴薯のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌

さく

痛切

豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、さくを掛けに行つた。馬鈴薯の花が盛の頃、試みに土の中を探つて見ると、はや丸い薯が幾つも幾つもその根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の丈よりも高く手に絡みついた。粗末ながらも、自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手でよく整理されてゐる畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが、痛切に自分の身に感じられるやうになつた。

文章の手本とすべきものが何程我々の周圍にあつても、それを悟らなければ仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの第一歩だ。

界隈

簡素の美

表白

結晶の力

淺草の新片町に住んでゐた頃、家が淺草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初の中はむやみと手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある艪を前へ押し、手許へ引きして、骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第次第に手足を動かすことが少なくて、身體全體の力でゆつくりと艪を押すことが出來るやうになつた。「むかうから大きな傳馬がやつて來たぞ。あいつに一つ衝突しないやうに。」かう思つて漕いで行く樂しみなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには、「力の省略」があり、「簡素の美」があつた。

文章の道に於ても、むやみと筆を弄することが、決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶の力」がある。

—（藤村全集）—

與謝野晶子
堺市の人、故與謝野寛の夫人、歌人、評論家、文化學院學監、明治十一年生。

六　日本新女性の歌

與謝野晶子

東の國に美しく
天の恵める海と山。
比べよ、それに適はしき
われら日本の女子あるを。

中にも特にすぐれたる
瀬戸の内海、富士の雪。
その優しさと氣高さは
やがてわれらの理想なり。

われらは懷く朗らかに、
常に夜明の喜を。
心の奥に光るもの
春の日に似る愛なれば。

日本の女子は誇らねど
深く恃める力あり。
輕佻浮薄の外に立ち
眞の文化に生きんとす。

技術と學の一切を

今ぞおの〳〵身に修む。
斯くして立つは新しき
御代の男子の協力者。

聰明にして優雅なり、
慎ましくして勇氣あり。
匂へる處女、清き妻、
智慧と慈悲とを滿たす母。

固より女子の働くは
遠き祖先の遺風なり。
男子と同じ務にも

共に奮ひて進み出づ。

櫻と梅のひと重八重
開く姿は異なれど、
御國のうへに美しく
すべて香れる人の華。

尾崎喜八
東京市の人、詩人、明治二十五年生。

高麗鴉

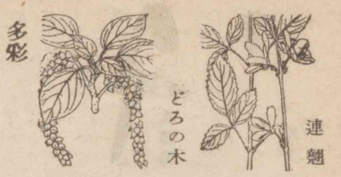
倦怠

七　初夏の京城

尾崎喜八

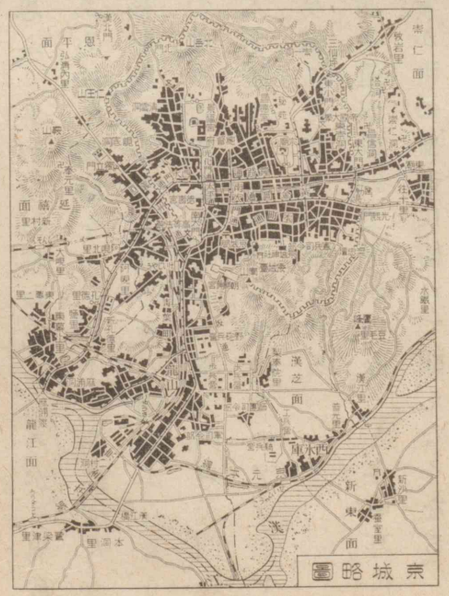
初夏が來ると京城を思ふ。あの山の都の上にひろがる異常に澄んだ青空を思ふ。あらゆる街路を美しくする朝鮮婦人の輕やかな著物と、その色彩を思ふ。そよ風の吹く明方から、もう青い朝霧に卷かれて、虹のやうに浮上つてゐる南大門、東大門の諸門を思ふ。それから太平通から光化門へかけてのアカシヤの並木を思ふ。初夏の京城こそ美しい都である。

うね〳〵と長い本町通の道が乾いて平かになると、冬中耳についてゐた高麗鴉の嗄聲が、町の雜音に紛れて聞えなくなる。溫突のむせつたい、しかし憂鬱に懷かしい青い烟と、あの永遠な倦怠と寂寞な冬が鴨綠江の彼岸へ去つて、春が來たのだ。否、春と夏が同時に來たのだ。活氣に滿ちた樂しい生活の時が來た



のだ。京城はよみがへる。人の心もよみがへる。太陽は花だ。空氣は胸もすく飲料だ。巨大な鯨のやうに横たはる南山の蜿蜒たる山麓へ、桃・櫻・連翹*・杏*・どろの木・アカシヤ・ポプラ、花と綠の五月初の大波が打寄せる。

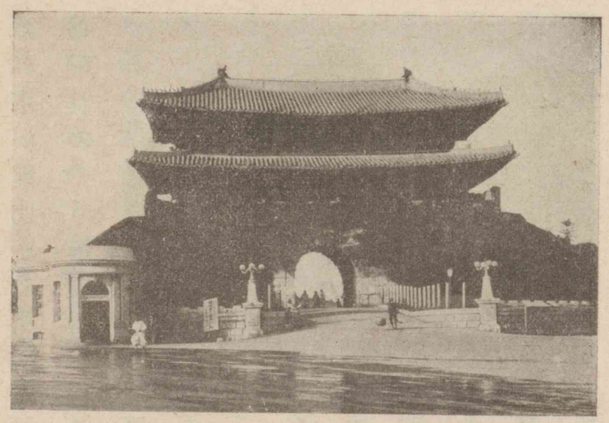
都全體が明るくなつて、多彩の舊都を三韓以來のそよ風が吹きわたる。人々は、何かしら浮き浮きとした自由な氣持になつて、夕方から夜にかけての本町通や鐘路大通は、きら〳〵光る電燈の明るさのうちを、散歩や買物の人のなだれが渦卷く。鋼のやうにかん〳〵凍てついた冬の日、吳



凍てつく

燦々

服店の前で奇妙な聲をふるはせながら、金色に焦げた燒栗を賣つてゐた人が、いつの間にか花賣に變つてゐる。冬中霜にちぢかんでゐた商店の陳列窓がすつかり透きとほつて、買物をしたい陽氣な心をそゝり立てる。南山の公園に立つて、遠く光化門通を眺めると、白茶の路が帶のやうに解けて、白衣の人の姿が蟻よりも小さく散らばつてゐる。昌德宮の屋根の綠青色の瓦が、大きな太陽の下で見事に反つてゐる。燦々とした木立の茂みの間から、南大門が綺麗に蔦にからんだ頭を



南大門

莊重　じくざく

輕羅　周衣

出してゐる。奉天行、仁川行、さては東京の空の懷かしい釜山行の列車が、龍山から漢江の長い鐵橋をかけて、白い烟を吐きながら玩具のやうに動いて行く。鐵橋の向うは、漢江の水の紺碧に、河原の砂の眞白な鷺梁津の小さい村だ。その後に南漢山が莊重に横たはつてゐる。正面は北漢山・三角山・仁王山。じくざくと初夏の空をかぎつて、その山腹を昔の城壁が上つたり下つたり、消えたり現れたり、幾つかの門を玉と貫いて、珠數のやうにこの都をめぐつてゐる。あゝ初夏だ。大陸の大きな初夏だ。

飛行機上より見たる北漢山

袷を著る季節はごく短い。街路樹のアカシヤに花が咲く頃になると、人々は薄い周衣の輕羅の裳を

淡彩　遊山　甲高　趺坐

ひら〳〵させる。ぴたりと分けて小さく束ねた眞黑な髮の毛、薄化粧の顏、三日月のやうな細い眉毛、優雅な朝鮮婦人の淡彩の衣服の胸に結んだ長い紐が歩くたびに動く。それが、涼しい電車のなかや、廣い明るい往來の到るところで見られる。實に朝鮮の美術の精神が、彼等の姿のすべてにある。

昔ながらの人々が遊山を樂しむのもこの時である。それは字義通り山で遊ぶので、京城では廣い南山一帶の低い松林の斜面が選ばれる。樹蔭の少ない花崗質のうね〳〵と續いた山腹を、正午の靜寂のなかで、あてもなく散歩してゐると、意外な處から笛と鼓の音が聞えて來る。それに交つて甲高な、間のぬけたといへばいへる歌の聲が傳つて來る。純粹に朝鮮の服裝をした男が五六人、地面の涼しい處に布を敷いて奏樂をやつてゐる。笛を吹く若者、趺坐の間に鼓をたゝく老人、歎くやうに訴へるや

わだかまり

生粹

饒舌の川

うに、はてしなく續く單調な歌の節が流れる。それはさながら太古の民の素朴純眞な遊山である。この音樂はたなびく烟を思はせる。この國の古い美術に現れた優美な線を思はせる。石佛の線を、また壺や皿にゑがかれた雲や草の自由なわだかまりのない線を。

鐘路通の初夏の夜こそ賑やかだ。電車通の兩側にはポプラの並木が夜目にも青く新綠をつらね、東京の緣日を思はせる露店がずらりと並ぶ。賣る品物も東京のと大差はない。併し商人も散歩の群集もすべて生粹の朝鮮人だ。そのよく饒舌ること、それは正に一箇の饒舌の川だ。始めて聞けば、罵りあつてゐるのかと思ふ。競賣、能書ならべ、說明、ひやかし、惡口。そしてのんきな人間はいつまでもいつまでも、ぽかんと一人の商人の饒舌に耳を傾け、氣ながに石鹼や齒磨粉の試驗管實驗を眺めてゐ

閑人

淳朴

目まぐるし

傳統

るのだ。これも內地と變りはない。たゞそれをしやがんで、ゆつくり聽いてゐる閑人があるくらゐが、內地と違ふ點だ。南山の絕頂の岩や、倭城臺の高みから、半日くらゐしやがんだまゝで煙草をふかしながら、彼等の都の風光を眺め暮す者は珍らしくない。俗にいふ立話が、朝鮮ではしやがみ話である。冠に盛裝、眞新しい草鞋をはいて、彼等は往來で會話したり、議論したりする。もとより若い教育のある者はそんなことはしない。併し白髯の美しい老人が、悠長なしやがみ話をしてゐるのを見るのは美しい。都會にゐながら淳朴な田舍にゐるやうな氣がする。

この古い都が至るところ青葉で飾られる初夏は、內地のやうに目まぐるしくなく、こせつかず、悠々として、一切の事物が、大まかな日光や、風俗や、空氣や、傳統と調和する。それを味はふには、昔の王宮附近一帶の町の方がよい。貞洞や孝洞の細い町筋で、

閑寂な五月六月の美しい晝間、遊んでゐる朝鮮人の子供のかはいさや、餘り姿を見せぬ町家の主婦たちを見るのは、私たちにはうれしい。そこには淳朴がある。そこでは古來の美がよく護られてゐる。一切が一樣の空氣にとけこんで、この國の由緒ある歷史を知らずしていかしてゐる。朝早くから馬上の心も輕く、東大門をくゞつて、清涼里への道すがら、あの朝鮮特有の柔かな線をもつた藁屋根の低い家々を見るのは樂しい。小山や丘の形さへ同じやうにゆるやかな線をもち、所在にポプラの青葉が長い髮をゆすつてゐる。崇仁面の田舍ではもう蟬が鳴いてゐる。のどかな電車がアカシヤの長い並木を走つてゐる。風光は奈良や京都の郊外よりも少し憂鬱でありながら、大陸の氣息が何よりも心をひろげる。その思ひ出の多い初夏が又めぐつて來たのだ。

（新文學選）

木下杢太郎
本名は太田正雄、靜岡縣の人、醫學博士、東北帝國大學教授、明治十八年生。

諧謔
築牆
彈性

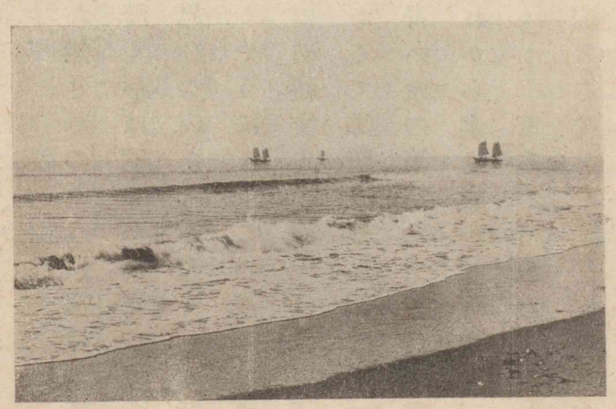
八　波と船唄

木下杢太郎

一條の微かな波の高まりが、有るか無きかのやうに海原のほとりから離れて來て、だんだん色は濃く、形は明らかになつて、——人に擬していふならば、或諧謔を思ひついた人が、遠くから話相手と目ざす人に笑ひながら近づくやうに——この波の高まりもだんだんと渚に近寄り、遂に笑の破裂するやうに「ざ、ざ、ざ、ざ、ざ……」とさわがしく黑くさゝやき、かくて沸騰せる波頭は「ざつくろん——」と長く引いて碎ける。青い水の築牆は全く白い音の泡となつてしまふのである。それから水は磨かれた蛇紋石のやうな滑かな渚をすべり、「ざゝあゝ——るろ、るろ、るろ——」といふやうな優しい、しかし彈性の抵抗ある音と言葉を立てながら、さうしてまた靜かに「すら、すら、すら……」と引いて行くのであ

る。もうその時は第二の波が高まつて、既に波頭が散りはじめた時である。――かうして波は飽かず優しいいたづらを續ける。で、その引いてゆく波の一筋、泡の一つ一つにまで、折しも西山に近づいた夕日の影が斜に當つて、かくて石鹸玉の色のやうな美しい夢の模様を現すのである。

このやうな波の主な運動の間に、また長い小説の插話に比ぶべき小さい葛藤がある。殊に渚を引く波の歸るものの往くものの間に、かの蟻の挨拶のやうな表情、輕い優しいさんざめきがあるのである。



波

插話
葛藤
さんざめき

靜かに心を鎭めて、この波のなす曲節を聽いてゐると、かの漁夫の集會の時に歌ふ船唄の調子を思ひ出さずにはゐられなかつた。波がこれを生んだといつては餘りに牽强ではある。しかし海や波、その心持がこの唄の曲節と深い關係のないといふ事は全く考へられない。その唄のゆるやかに流れてゆく時、突然音頭を取る人の高い轉向に驚かされる事がある。それは突然大きい波が碎けた時の心持によく似てゐる。またその唄の中に、高い問答のやうな調子が長く續くところのあるのは、濱邊の聲高の生活が、靜かな夕波の曲節を崩すのによく似てゐるのである。

―（地下一尺集）―

牽强
轉向

正岡子規
名は常規、松山市の人、俳人、歌人、明治三十五年歿、年三十六。

伊藤左千夫
名は幸次郎、千葉縣の人、歌人、大正二年歿、年五十。

九　青蚊帳

正岡子規

いちはつの花咲きいでて我が眼には今年ばかりの春行かんとす

別れ行く春のかたみと藤波の花の長ぶさ繪にかけるかも

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

伊藤左千夫

あたゝかき心こもれるふみ持ちて人思ひ居れば鶯の鳴く

朝川にうがひに立ちて水際なる秋海棠をうつくし

と見し

おりたちて今朝の寒さに驚きぬ露しと〳〵と柿の落葉深く

牛飼が歌よむときに世のなかの新しき歌大いにおこる

長塚節

垂乳根の母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕さりにけり　（上州入山の山中にて）

こゝろよき刺身の皿の紫蘇の實に秋はにはかに冷えいでにけり

我が命惜しと愛しといはまくを恥ぢて思ひしはみ

な昔なり
生きも死にも天のまに〳〵と平けく思ひたりしは
常のことなりき

岡　麓

岡麓
名は三郎、東京市の人、歌人、明治十年生。

寺庭の古木の銀杏芽をふきて夕あつまる鳥さわがしき
このあさけ桐の花咲く屋敷町いとけなき兒を歩かせにけり
近よりし時雨の雲に暮はやし笹山なびけ風わたるなり

島　木　赤　彦

島木赤彦
本名は久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一。

窓の外に白き八つ手の花さきて心寂しき冬は來にけり

雪降れば山よりくだる小鳥おほし障子のそとに日ねもすきこゆ
まかゞやく夕燒雲の下にして凍らんとする湖の靜けさ
つぎつぎに氷をやぶる沖つ波にごりをあげてひろがりにけり
おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺に來にけり　（善光寺）

齋藤　茂吉

齋藤茂吉
山形縣の人、醫學博士、歌人、明治十五年生。

晝の野にこもりて鳴ける青蛙ほがらにとほる聲のさびしさ
ひさかたの時雨ふりくる空さびし土におりたちて鴉は鳴くも

中村憲吉
廣島縣の人、歌人、昭和九年歿、年五十一。

23 寄りそへる吾を目守りて言ひたまふ何か言ひたまふわれは子なれば

24 死にちかき母に添寝のしん〳〵と遠田のかはづ天に聞ゆる

25 のど赤きつばくろ二つ屋梁にゐてたらちねの母は死にたまふなり

中村憲吉

26 雨あとの山は目ぢかしこのあした芽をとゝのへし樹々に驚く

27 曇り夜の池はにほひて近くあり灯のとゞく岸に蛙の鳴くも

28 朝夕の息こそ見ゆれもの言ひて人にしたしき冬近づくも

貝原益軒
名は篤信、筑前國の人、儒者、正德四年歿、年八十五。

移ろふ

消えがて

こそ……眺なれ

けおさる

一〇　四時の樂しみ

貝原益軒

一　花ざかり

花もやう〳〵咲き續きて、梅花既に移ろひて後新なるは、我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃、紅なるは、たなびく雲の面影の立つ心地す。李、白きは、消えがての雪の梢に殘れるかと見えて、いとうるはし。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多きが中にも、第一の見ものなれば、梅散りて後、この頃の異花は皆けおされぬ。されど、日頃待たせ待たせてやう〳〵

貝原益軒

よしさらば……
續古今集、藤原爲家の歌。

思ふどち
あくがれありく

無賴
杜
杜甫、字は子美、支那唐代の詩人。（西暦七二一―七七〇）

陳希夷
支那五代の道術家（西暦？―九八九）

咲けるが、飽くまで見るほどもなく疾く散るは、又うらめし。

*よしさらば散るまでは見じ山櫻花のさかりを面影にして

と古の人の詠みけんも、後の思ひ出にせんとにや、情深し。

春やう〳〵深くなれば、風和かに日暖かに、百草芳を爭ひ、群芳艶を競ふ折なれば、何れの處か春のなからんや。かゝる景色に觸れては、人の心も浮きたちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれありき、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし心を快くするわざなれ。世の中の、いみじく嬉しき事のあるが中なる、その一つなるべし。わが心の樂しみを知らざる人は、無賴の少年の閑を偷みて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に香しきも、この折なり。杜*が詩に、「鶯の歌暖かにして、正に繁し。」といひ、陳*希夷が、「野花啼鳥一般の春。」と詠ぜ

春宵一刻……
宋の蘇軾の詩。

惜花……
宋の林希逸の詩。

あたら夜の……
「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらん人に見せばや」（後撰集、源信明）

夜の間の風……
「朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」（拾遺集元良親王）

うしろめたし

惜しめども……
「惜しめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな」（新古今集、素性法師）

今めかし

しも、皆この時なり。花に坐し月に醉ひて、二つながら兼ねたる樂しみ、「*春宵一刻値千金、花有清香月有陰。」といふ詩を思ひ出でられぬ。又「*惜花春起早、愛月夜眠遲。」といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人の*あたら夜の月と花とに背きて、空しく臥すはいと惜しむべし。又*夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くる事遲きは、花を惜しまざるなり。

二　杜鵑

*惜しめどもとまらぬ春已に去りぬれば、いはぬにきたる夏衣のうら珍らしく、今めかしう改まれる頃ほひ、大方の空の景色心地よげなるに、青葉の梢若やかに、物毎に春に立ちかはりて、又世異なる有樣なるも、いとなんめでたき。

綠蔭晝寂を生ずれども、わびしからず。閑談に耽る人は繁花にも優れりとす。折待ちえたる杜鵑の初音まづなつかしくて、

空もとゞろに
「五月雨の空もとどろに杜鵑何をうしとて夜たゞ鳴くらん」（古今集、紀貫之）

あなかま
卯の花の……
「時わかずふれる雪かとみるまでに垣根もたわに咲ける卯の花」（後撰集、讀人知らず）

さいつ頃
おどろおどろし
あやめ

鶯の啼く音すでに老いたるに代れる心地すなる。もろこし人は杜鵑の聲聞く事を惡めども、わが日の本にては昔よりこれを憐みて、歌にも多く詠めり。夜もすがら空もとゞろに啼きわたれども、聞く人皆あなかまとは思はず。多からぬ所は、今一聲だに聞かまほし。又啼きゆく方の人も待ちなんと思へば、過ぎゆくも更に怨むべからず。卯の花の垣根の雪に紛へるも、ひとりこの月の名を負ひて、美をもはらにすと謂ふべし。凡そ卯月の景色は清くやはらかにして、空晴れ雨久しく降らず、餘寒盡き、日彌長くして暇多ければ、出でて遊ぶによし。

やがて五月になりぬれば、大空の景色さいつ頃に引きかへて、五月雨久しくつゞき、折々は鳴神おどろおどろしくて、降らぬ時だに曇らはしく、物のあやめも知らず、園をうかゞふべきひま稀にして、常に垂れこめて日數を經るもわびし。

だふらわ

蓮葉の……
「蓮葉の濁にしまぬ心もてなにかは露を玉と欺く」（古今集、僧正遍昭）所せし

清少納言
清原元輔の女、一條天皇の皇后定子に仕ふ。

夏は夜……
「夏は夜、月の頃は更なり。」（枕草子）

このねぬる……
「このねぬる朝けの風の變るより荻の葉そよぐ秋や來ぬらん」（新後拾遺集、等持院贈左大臣）

三　端居の風

水無月の頃になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも快し。池の心深く、蓮葉の濁にしまずして、花ならで夕風に匂ひわたるだにも、こと草にすぐれたり。殊に花の笑の脣開けたるは、所せきまでかをりみちて、世に似たるものなく清らなり。涼を逐ひて木蔭に休らひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉を掬び、夏を忘るゝ心地するも、いさぎよし。光明らけき夜半の月を、清き水に宿して見るは更なり、遣水の音など聞くも、いみじう心ゆくばかりなり。日頃經て暑さ堪へ難きに、夕立のしぐれわたりて、名殘涼しきも、いと快し。清少納言は「夏は夜」といひつれど、夕は蚊といふ蟲人を螫して、年老いてはことさらいみじう堪へ難ければ、たゞこのねぬる朝けの風の涼しき景色こそ、清くして心にかなひつれ。

年のは
上の弓張
居待
三秋

四月の色

秋のもなかになりぬれば、一年を經て待ちえたる月あきらけきは、凡そ天地の間にならびなきついでひとつの見ものなれば、よろづのうるはしき景色は、皆その下なるべし。この夕この景にあへるこそ、うき世の中のおもしろさも、あはれさも、殘らぬ折なれ。年のはに、一とせのうち月ごとに、上の弓張より居待の頃まで、空はれぬれば、夜ごとに、心を樂しましめ、目を悅ばしむる事更に數なし。ことさら、三秋の間、折々のいみじき光を、年ごとに心にまかせて見る事、まことに幸多きこの世なり。凡そ、天が下の君は、八すみを知ろしめして、天地は皆その領し給へる國の內なれど、いやしきわが輩まで、天つ御空にたゞひとつ懸れる月をおのがものとして、ほしいまゝに仰ぎ見るも、いともかしこく、身にし餘りて、いみじき幸なり。やどり分かず、賤しき巷をも同じく照らせる、いとめでたし。年々に、月と花とをあくまで見るは、まことに思ひ出多きこの世なりと謂ふべし。あたら夜の月なれば、同じくは心知れらん人と共に見ん事ほいなれど、同じ心に見る人稀なれば、西行が「ひとりぞ月は見るべかりける」と詠めるも、うべなり。もろこしの人も、「秋月は俗士と見るべからず。」といへり。李白は、「今人は古時の月を見ず。」といへれど、昔世々の人の眺めこしもこの月なれば、古人のかたみとなれるも、昔おぼえてしのばし。古今の人の世を去りゆくは、流水の逝きてかへらざるが如し。たゞ月の光のみ、いにしへ今、かはる事なきこそ、こよなうめでたくたふとぶべけれ。月の、梧桐の上にいたり、風の、楊柳の邊にきたるは、心を洗ひ興を催して、えもいはぬ快き折ふしなり。四時ともに思ひ出多きこの世なれど、とりわき、秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。

ほい
西行
俗名は佐藤義清、歌僧、建久元年寂、年七十三。
ひとりぞ月は…
「寂しさに哀もいとゞまさりけり獨りぞ月は見るべかりける」（千載集）
李白
名は太白、青蓮と號す、支那唐代の詩人。（西暦七〇一―七六二）
月の梧桐の上に…
「梧桐の月懷中に向つて照らし、楊柳の風來りて面上に吹く。」（邵雍）
とりわき

少し春ある……
「埋火に少し春ある心地して夜深き冬をなぐさむるかな」（風雅集、藤原俊成）

木の葉ふり……
「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯にさびしき」（新古今集、祝部成茂）

よそほし

五　埋火

冬も來ぬれば、今朝よりなるゝ埋火のもと、やう〳〵立ちはなれ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木々の梢、淺茅が原も冬枯の景色となり、面がはりするも、秋に異なる眺なり。神無月の時雨も過ぎて、日暖かなれば、少し春ある心地す。うべこの月を小春とぞいへる。されど一の日・二の日やう〳〵かさなれば、風氣愈〻劇しく、木の葉ふりて山もあらはに見え、殘れる松も峯にさびし。春・夏・秋の艶なる景色、よそほしかりつる有樣、皆この時に至りて盡きぬれば、殊の外にも變れ

雪

冬の夜の……
「花紅葉の盛よりも、冬の夜のすめる月に雪の光りあひたる空こそ、怪しう色なきものの身にもしみて（中略）面白さもあはれさも殘らぬ折なれ。」（源氏物語）

はだれ雪
いらゝく

樂訓
三卷、貝原益軒の著、人間諸種の正しき樂しみに關する論說感想を記せしもの、所謂益軒十訓中の一。

る空かなと、目驚かれぬ。

日ごろいみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色異なる有樣なり。冬籠せし梢の枯れたるも、再び花咲けるが如し。ことさら、冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なく獨り身にしみて、あはれも深けれ。空晴れて後まで、友待つばかり所々に消殘りたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、する業なく、たゞ袖ぐくみしていらゝき居る人は、いとわびしげに見ゆ。或は埋火にむかひ、文を卷きひろぐるを以て業とする人は、樂しみ深くぞありぬべき。凡その事、年に先立ちて早く計るべし。若き時勉めて文を讀みならはば、かゝる時もわびしかるまじ。

―（樂訓）―

盛夏讃　（矢澤弦月筆）

二　女性美と競技運動

安田弘嗣

安田弘嗣
日本體育會體操學校教授。

ブィーナス　ローマ神話の春の女神にして、庭園菜果の保護神、後、ギリシヤ神話のアフロディテと混同され、美と愛の女神となる。

天稟　表出

文化の流に比例して、人類は美を要求するものである。美は二つの立場より分類される。一は大自然の美、二は人工美である。この二者の中、最も幽玄にして崇高なるものを、大自然の美とする。而して自然の生める美の最大なるものは、人體の美である。就中女性の美は、宗教的色彩をさへ帶びて讃美されて來たものである。かのブィーナス女神像は、女性美の最も完全にして、かつ崇高なるものと賞讃されてゐる。

そも〳〵人體の美は、喜怒哀樂の感情の自由なる表出に富み、かつ音聲の優雅は、その四肢・軀幹の曲線運動を調和するに至るもので、宇宙の何ものと雖も、この美的表現には及ぶべきものがないのである。もとより人體の美にしても、天稟の性によると

はいへ、その血色の美、筋肉の美は、やがて感情の優美なる表出と調和して、無限の美を形成するものである。以上の諸要素は、體育運動によつて、更に美の中心生命に接近して行くものである。古代ギリシャ民族が、音樂と體育とによつて心身を訓練し、美の表現に努力し、つひに世界文化の淵源をなし、今日に至るまでもギリシャ文化の榮光は、近代人を支配してゐるのである。

無限に伸びて行く生命力は、適切なる競技運動によつて培はれて行くものである。競技運動は、以上の肉體的要素を訓練し得る可能性を有するものである。かくしてこそ身體諸機能は適度の活動をなし、十分なる營養と睡眠とをとり、日光に浴して新鮮なる空氣を呼吸し、氣自ら闊大となり、生命力はいやが上にも強まるものである。美の表現はかくして得られるのである。

深閨の處女が、運動の不足による顏色憔悴、形容枯稿といふが

機能
闊大
顏色憔悴
形容枯稿

均整

歌麿　姓は喜多川、浮世繪の大家、文化三年歿、年五十四。

如き身體に、如何に錦繡を裝うたとしても、美とは稱することが出來ない。

吾が國過去の女性美は、幾多の變遷をして來たが、均整・調和の美、血色の美、生命力の美、健康の美などを經て來たものではなかつた。所謂歌麿の畫いた垂柳の美で、とても近代文化の光の中に持來たるべき性質のものではなかつた。

もとよりこれは衣食住の生活條件より來たものであつたが、近代女性の生活は改善され、身體運動に自由なるものとなつた。この結果女子の身體は大なる發達をなすに至つた。これは國家の意氣、民族の發展の上に大いに祝福すべきことである。

—（女子體上競技の實際）—

三宅花圃　名は龍子、東京市の人、文學博士三宅雄二郎の夫人、明治元年生。

を

優にやさし

一三　草花の頌

三宅花圃

夏は、風も親しむべし、月も賞すべし。さはいへど、なほ草花の咲きほこれる庭園こそ嬉しけれ。葎・蓬生といふだになほ己が身のほどの花は咲くものを、人の愛でつちかへる花にいづれ優り劣りはあるべき。親しみて見れば、花といふ花には、それぞれ愛づべきふしの見いださるゝもおもしろし。

赤豆隱元といふを、彼岸の頃三つ四つ土にふせておきつるに、六月の中頃よりすく〳〵と成長し、蔓には赤き花つきたり。いと愛らしき花なれば、毎年これを植うるに、今は庭になくてならぬもののやうになりたり。

蔓ある草は優にやさしうおぼゆるものぞかし。自然薯といふ芋を人の贈り來たりし事ありき。あまり細きがありしかば、

むかご

のうぜんはれん

あけび

魁く

てりはたゝく

垣の根に植ゑておきしに、零餘子あまた實りて落ちつるが、彼處此處と今年はあまた生ひいでぬ。竹を添へてやれば、這ひまつはりて茂りあひぬ。白き花の咲くべき頃もをかしかるべし。實のほろ〳〵と秋風にこぼれんほど、いかにあはれ深からんと樂しむ。かく、ふと蔓草を愛でおもふ心つきてより、瓢簞も植ゑにき。絲瓜も植ゑにき。のうぜんはれんのなよらかなる、あけびかづらの延びんまゝにのびたる、皆とりどりにをかしかるべしとて、松杉などにそへて植ゑにき。

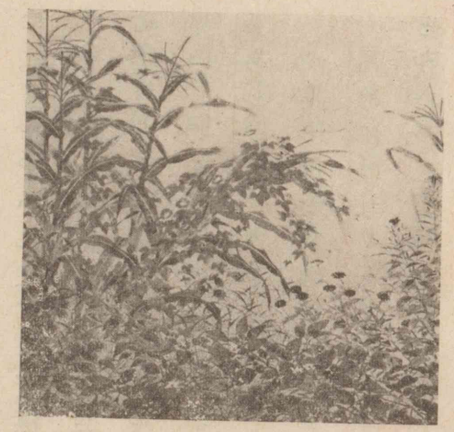
朝顏の花はさのみ愛でおもはざりしが、今年は農事試驗場にいひ遣りて取りよせし芽生のいとも見事に、獅子など名をもつくべからん花の、一つ魁けて咲きたるもをかし。南瓜のころがれる畠に、畫顏の花の、眞畫のてりはたゝく日かげを物ともせず咲きいでたるを見ても、

伊東大人
伊東祐命、歌人、明治二十二年歿。

萬綠叢中
「萬綠叢中紅一點、人を動かすに春色多きを須ゐず。」
（書言故事）

よられたる草葉の中に咲きにけり、つゆもたのまぬ
畫顏のはな

と伊東大人のよまれし歌をおもひいでぬ。


後園（木本大果筆）

スウィートピーのほのかをれるもなつかし。去年の秋の彼岸に種を蒔きしが、大きく丈のびたれば、竹などそへてやるに、蔓のこれにすがりて風にゆらぐも、うるはし。今年の春蒔は、丈も低し、葉色も惡し。萬綠叢中紅一點とうたひし柘榴も、夏の庭にはおもしろく、花も實も、こは仙人めきたり。

仙人掌こそおもしろきものなれ。冬は眠れる如くにして、夏

しなさだめ

木下幸文　備中國の人、香川景樹の門人、文政四年歿、年四十三。

になれば、いやが上にも芽をいだし、桃色・赤・黄などの花をつく。花はもゆるが如くにほへるに、そをわが上ともしらぬさまに、山の如く冷やかに立てる有樣のをかしさよ。

狹き庭を心ひろびろと見わたして、花のしなさだめしつゝ緣に腰うちかけたるほど、昨夜の雨に萩の泥にまみれ伏したるを見いでて、あなあはれといそぎかき起せば、はや花の咲きたる枝もありけり。木下幸文が、

露に伏す萩の下枝かきおこし見れば花こそ咲きそめにけれ

とうたひしをおもひいづ。かくその人の歌などをおもひいでて、同じ花にむかへば、さもその人と對ひて語りあふ心地もするなり。花に寄せたる人の心は、今のも昔のも、なつかしうこそ。

—（其の日〳〵）—

小林一茶　通稱は彌太郎、俳諧寺とも號す、信濃國の人、俳人、文政十年歿、年六十五。

竹植うる日　陰曆五月十三日のこと、支那にてこの日竹を移植すれば、よく繁茂すといふ。

とみに

執念

ひた

俳優

一三　をさな兒

小林一茶

こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節繁きうき世に生れたる娘、ものにさとかれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあはゝ、天窓（つむ）てん〳〵、かぶりかぶりふりながら、おなじ子供の風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直ちに外のものに心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子のうす紙をめり〳〵とむしるに、よくしたよくしたとほむれば、まことと思ひ、きやらきやらと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、迹なき俳優（はいゆう）見るやうに、なか〳〵心の皺を伸ばしぬ。

愛敬

振分髪

二十五菩薩　人の死に臨みし折極樂淨土より紫雲に乘じて管絃を奏しながら迎ひに來るといはるゝ諸菩薩。

小鹿の角のつかの間ものから

又、人の來たりて、「わん〳〵はどこに。」といへば、犬をさし、「かあかあは。」と問へば、烏に指さすさま、口もとより爪先まで、愛敬こぼれてあいらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るゝよりも、やさしくなん覺え侍る。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、直ちに小椀投げすて、片ゐざりにゐざり出て、聲をあげ、手まねして、うれしげなるを見るにつけつゝ、いつしか彼をも振分髪のたけになして、おどらせて見たらんには、二十五菩薩の管絃よりも、はるかまさりて興あるわざならんと、わが身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。

かくて日すがら、小鹿の角のつかの間も、手足をうごかさずといふことなくて、遊びつかるゝものから、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃きかたづけて、團扇ひら〳〵汗をさまして、閨に泣聲のするを目の覺むる相圖とさだめ、手かしこく抱き起して、うらの畠に尿やりて、乳房あてがへば、すは〳〵吸ひながら、むな板のあたりを打叩きて、にこにこ笑ひ顏を作るに、母は長き胎内の苦しみも、日々の襁褓の穢らしきもほと〳〵忘れて、衣のうらの玉を得たるやうになでさすりて、一入よろこぶありさまなりけらし。

ほと〳〵

おらが春　一卷、小林一茶の著、日記體の隨筆及發句等を收む。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな

—（おらが春）—

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは
我と來て遊べや親のない雀
たのもしやてんつるてんの初袷
夕月をとつてくれろと泣く子かな
のどかさや淺間の煙畫の月
横乘の馬のつゞくや夕霞　（一茶）

今井邦子　名は邦枝、徳島市の人、今井健彦の夫人、歌人、明治二十三年生。

苛立つ

白日

現象

境地

一四　母と子

今井邦子

門の戸がちりんとあいて、人の這入つて來る氣配がした。暑い暑い日の午後三時頃である。机に凭つたまゝ、あまりの暑さに書かうとするものを纏める氣力もなく、心ばかり苛立ちながら、白日の夢を見るやうな斷片的なさまざまの現象が、頭のなかに浮んでは消え、浮んでは消えするとりとめのない境地から引きもどされた。この暑い日ざかりに誰が來たものであらう？私は好奇心のまじつた人なつかしい氣持で、玄關から人のおとなふ聲を待つた。……と庭の中戸があいて、細長い竿の先がまづ頭をあらはし、それがずんずん無遠慮に庭に這入つて來る……。

「なんだ、坊やなのか……。」

私の顔には思はず輕い微笑が浮んだ。今年六つになる男の子が、長い蜻蛉竿を小脇にはさんで、燃立ちさうな赭い顔をしながら這入つて來るのである。右の手にはしをから蜻蛉を一つつかまへてゐる……。

いつもの六疊の居間に机を据ゑて、それに凭つてゐる母親を、男の子は一寸見ただけで、その前をずんずん通つて、自分の玩具箱の置いてある部屋に行つて、がたがた何かひつくりかへしてゐる。

「坊やは何をさがすの？　そしてこの暑いのに日なたを出あるいてゐると、病氣になりますよ。」

「うーん蜻蛉だい、蜻蛉を入れて置く箱がほしいな、かあちやん、箱頂戴。」

子供はひよつくりあひだの襖から顔を出した。まだ竿をかかえて蜻蛉を持つてゐる。

「いやな人、竿をうちのなかまで持ちこむなんてありますか。蜻蛉を縛つて上げるから持つていらつしやい。」

子供は慌てて外に竿を投出して、蜻蛉を持つて私のそばへ寄つて來た。

「しつかりつかまへておいで、さあ。」

私は白い絲を輪にして、蜻蛉の動かしどうしの足をねらつて絲をからげた。子供は息をころして、その白い絲と、黑いむじやむじやした毛のある細い六本の足の、その一本を一つだけゆはへられて、今こまむすびにされやうとする、蜻蛉はよくはのみこめぬが、何か自分によくない事が足のところでおこつて居るのを感知して、無意識に、併し烈しく反抗する、その絲のもつれを一心にみつめてゐる。と、刹那、三つの生物の眞劍さが、この白日の一點に、細い鋭いピラミッドをきづき上げた……。

ピラミッド

「さあ、むすべました。手をはなしてごらん。ほら、とぶでせう、ね。」

子供も私も一緒に聲を出して笑つた。子供は滿足さうに、又得意さうにそれを持つて、竿を抱へると、とんで出かけて行つてしまつた。日蔭でお遊び……などといふ母の言葉は、殆ど蜻蛉竿の前には虹のうなりよりも價値のないもののやうに……。

家の中は再び前の暑い沈默に返つた。が、私は机に凭つて、この度は明るい心に、生々とした思が湧上つて來るのを覺えた。

子供にはじめてあの竿を買つてやつた日、うちのあやのさん——働きながら勉强してゐる婦人——がいふ事に、

「坊ちやんがあの長いもち竿を振廻して、この小路を出ていらつしやると、通る人がみんな笑ひながらよけて行きますの。」

で、私たちは聲を上げて笑つたのである。

十方感謝

圍繞

その時の事が再び私を優しい笑に誘ひこんで行く。それからだんだん深く深く、つひに十方感謝の世界へまで到達する。

私は曾て、私の親しい親戚のTさんといふ文學士から悲しい昔がたりを聞いて、涙を流した事があつた。その人は故あつてうみのお母さんが、七つの年に里の家へ歸つてしまつたのであつた……。その悲しい空氣は、二年も三年も前から、その家を圍繞してゐたものであつたといふ。Tさんはお正月に友達と凧を上げて遊んでゐながら、ふとお母さんが自分の留守に里の家へ歸つてしまひはせぬかと思はれて來ると、忽ち凧をたゝんでしまつて自分の家へ足音を盜んで歸つて來る。そして胸を轟かせながら、お母さんの居間の障子の穴からなかをそつとのぞいて見ると、お母さんが寂しさうに針仕事をしてゐる姿が目に這入るのである。そこでTさんはほつと安心して、又足音をぬすんで外に遊びに出かけたといふ事であつた。そして縣道へ通ずる畑の道より外では遊ばなかつた。それはお母さんが里の家へ歸るなら、必ずそこの畑の道を通つて縣道へ出るはずなので、そこで遊んでゐれば、お母さんを引留める事が出來ると思つたのであつた、と話された。その事を思ひ合してみると、今歸つて來た自分の子供が、何と大膽に、無遠慮に、安心しきつて、母がそこにゐるといふ事さへも有るか無いかの空しい心で、私の前を通りすぎた事か。さうして自分の遊戯に耽りきつてゐる。それはほんとうにあたりまへの事であつて、而も而もかぎりない子供としての惠なのである。

健康の人の健康、食べるのに困らぬ人の三度の食事、さういふなかに數へらるべき、求めぬ先に與へられた、かぎりなき自然の惠なのである。

喜志子　長野縣の人、故若山牧水の夫人、歌人、明治二十一年生。

戰慄

えにし

子等ゆ見なば我は光か尊くもかしこきことぞいと
し子たちよ　　喜志子

友の歌が心に浮ぶ。……水垢離をとる時のやうなつゝましやかな戰慄が身をすぎて通つた。

嗚呼！子と親と共に住んでゐる家！それは當然すぎる事であつて、而も思ひ至れば自然の深き惠である。空しきにも似たその日常、そこにおのづからなる深いえにしの絶たれない豐かな惠があるのであつた。親によつて子は生き、子によつて親も生きる、そのぬきさしならぬ碁盤の線の、母といふ目の上にぱちりと置かれた自分の位置……たゞそこにじつとしてゐるのが、すでに事業よりも重い役目をしてゐるのであつた。

この事に目覺めさせられたのは、何といふ驚であつたらう。それは血と肉と涙で得た一つの悟といつてもいゝ程の世界であつた。それは見たところ、決して決して華やかなものでも、莊嚴なものでもゆゝしいものでもない。まことにあつけなく見すごしにすれば出來さうな、有るか無いかさへも日頃心に留めてゐない日常の連鎖、水の低きに流れるやうな自然の歩その事であつた。

莊嚴

ゆゝし

連鎖

母が母としてそこにゐる事、そこを守つて守りぬく事、その目的は安逸を欲する爲ではない。苦しい涙と自己犧牲と、時には身の震ふ程の悲しみにも耐へ、人によつては屈辱にさへ耐へて、この空しきにも似た日常を續けて行く所に、人間の頭腦で判斷する事以上の深いものが果されて行く。その果されて行くもののなかに、自分の眞生命もふくまれてゐるのであつた。そこに十方感謝がある。生かされあふ深い世界があるのであつた。

安逸

眞生命

やゝもすれば火のやうに燃上る心、自ら切つて出ようとあせ

る心、それは大方眞實の世界を却つて遠ざける。この微妙な交叉にまで身を置いて、はじめて大自然の生かす道の如何に微妙にして豐かなもの、洋々として迫らず、而も末徹つたものであつたかに驚き服すのである。

私の心は又してもそこに歸つて行つた。何事も耐忍びて、水の流るゝが如く行かしめよ、自然の世界に歩ましめよ、飛躍すらもその道に於てのみあらしめよ、やうやくにして胸におちて來たこの世界を一歩一歩ふみしめつゝ、深き感謝にをらしめよ。

私はいつか合掌してゐた。靜かな涙が白日の光のなかに點點とこぼれおちてゐた。

朝さむるすなはち側に吾子はをりこの世の常のさきはひを思ふ

（茜草）

さきはひ

前田晁　山梨縣の人、創作家、明治十二年生。

すはえ

一五　私の禮拜

前田晁

私の生れた家では、屋敷の東北の隅に屋敷神を祀つてある。小さな石の祠で、その傍には大きな梅の老木がある。幹は半ばは朽ちてうつろになつてゐたが、それでも春の氣色がめぐつて來ると、必ず花を開いて芳しい香をはなつた。そして根もとからは更に別のすはえが出て來て、年を逐うてまつすぐに伸びて行つた。

私は子供の時分、元日とか、自分の誕生日とか、一月二十五日と六月二十五日の天神樣の祭日とかには、朝未明に起きて、顏を洗ふと、必ず袴を著けて、その屋敷神樣へおまゐりするやうに定められてゐた。

家からそこまで行くには、池の傍をとほつて、屋敷の中を貫い

蕗の臺

感應

儒臣

天命

て流れてゐる小川を渡つて、桃の木や杏の木や柿の木の下をとほらねばならなかつた。柿の木の下には、蕗が作つてあつて、春のはじめならば、そこに青い小さい蕗の臺がいくつもかぞへられた。

私は祠の前へ行くと、低い石段の下に立つて、學問が出來るやうに、優等が取れるやうにと手を合せて拜んだ。私は勿論感應のあることと信じてゐた。

しかしその時分の私は、まだ天神樣が菅公で、その菅公は身を儒臣から起して、一世の政治家となつたえらい人であつたとか、讒せられたが少しも怨まず、天命を筑紫のはてに樂しんで身を終られたとか、さういふことは全く知らなかつた。屋敷神樣は自分の家の先祖だといふところから、私は天神樣を自分のお祖父さんぐらゐに思つて、懷かしんでゐたのである。

寶前

標置

有機的

殊勝

私が今でも天神樣の寶前に立つた時に、禮拜することを忘れないのは、この感情がそのまゝ殘つてゐるのである。菅公こそ、古今の人物中で、最も懷かしい人として私の胸の中に生きてゐるのである。

一體、今の世の中の人は、學問をしても、その學問をば一つの知識としておくだけで、自己の生活の一部、卽ち自己そのものの一部としようとは思つてゐないやうである。或人物を崇拜するとか、或理想を抱くとかといつても、それは自己を離れて、遙か向うの方の高い所に標置してあるだけで、崇拜するもの、理想とするものと、崇拜されるもの、理想とされるものとは、何等有機的の關係もなく離ればなれになつてゐるやうである。それを譬へてみると、ちやうど神社の前へ行つた時ばかりは、殊勝らしく拍手して拜むけれど、不斷は平氣で惡いことをやつてゐる人の心

行住坐臥
造次顚沛
對象
無內容

が、その實は全く神を離れてゐるやうなものである。私はそれよりもむしろ、神社の前ではよしんば祈らずとも、行住坐臥、造次顚沛だも神を心から離さぬことを心掛けたいと思ふ。私は理想を抱くにしても、古人を崇拜するにしても、學問をするにしても、すべてこの意味で行きたいと思ふ。

學問を我が知識のみとして滿足し、古人を我が崇拜の對象のみとして滿足し、理想を我が道程の目標のみとして滿足するやうでは、畢竟無內容の形式に煩はされるばかりで、本當の自分の生活のためには何の效果もないことになるであらう。それではならぬと私は信じてゐる。

（遠望）

田部重治
富山縣の人、法政大學・東洋大學教授、明治十七年生。
無私な心
憧憬
淨化
アルプス
歐羅巴西南部の山脈、平均高度三三〇米。

一六　登山の意義

田部重治

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を浮べてゐる山相は、自然が作れる最も偉大なる藝術である。幾度眺めても仰いでも、それは見る人に雄々しき心と、氣高き理想と、漲る血潮とを與へずば止まない。山の姿ほど無私な心を以て、淸淨なる魂を以て、憧憬し得られるものはない。

山を憧憬し、その姿に自らを虛しうすることの出來る心に、純眞ならざるものはない。山を求むる心は、この偉大なる自然の藝術を通じて、自然の魂と融けあひ、それが最も活ける力であることを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絕えず行はれてゆく。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと

思惟
渇望
萬葉　萬葉集、二十卷、我が國最古の歌集。
傾倒

思惟する文學者を多くもつてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、僞善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時代であつた。また歐洲歴史上自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。

德本峠より穂高岳を望む

日本の歴史に於て、自然を最もありのまゝの姿に於て讃美し、氣高い山の姿に限りない渇望の目を投じたものは、日本民族の最もあからさまな、最も清純なる情緒の源泉ともいふべき、かの萬葉の詩人であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は、餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一つの傳統とな

凄まじ
文獻

つて、民族の一部には登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし、明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。

即ち、大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり、凄まじい勢を以て社會の各方面に動いてゐる。

かくして、あそこの山こゝの溪谷は攀ぢられ、探求された。のみならず、今まで顧みられなかつた文獻が引出され、山岳・溪谷に關する傳說が求められるに至つた。昔から登ることが不可能とされた山、足を踏入れることの出來ないと思

黑部溪谷

主觀的　超越　全容　官能的

はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、究められないところが殆どなくなつた。

しかし、山を眞に愛する人には、山を究め溪谷を探り終へるといふことは、彼の山に對するよろこびの一小部分に過ぎない。彼の喜悅の大部分は、彼がこれらの自然に對して懷き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでもいつまでも同一の山、同一の溪谷に對してすら湧出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、かくして絶えず向上し進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

一たび頂上を究めると、その山に對する興味を失ふ人、一つの山がもつ溪谷、深林、その美しい色調、その朝夕の光線によつて全容に與ふる變化、一歩一歩を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多樣、そしてこれらの官能的に映ずる現象の下を流るゝ自然

機械的　量的　跋渉　質的

の生命の動を認め、それに耳を立てることをしないものは、自然を機械的に見る人でなければならない。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の懷く心は、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなければならない。

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に、質的に、山岳に對して深まり行く情緒に存することを深く信ずるものである。そしてその意味に於て、山を愛するものにとつては、登山は山を登り盡すといふことで決して行詰るものではないことを、私は茲に斷言したい。

—（山と溪谷）—

黑田初子　黑田正夫の夫人、登山家、明治二十八年生。

ピッケル　登山用の鶴嘴。

私共二人　筆者とその夫黑田正夫。

一七　西穗高へ

黑田初子

物凄い嵐がもうまる二日間も猛り狂つてゐる。唐澤谷から吹上げて來る風は、雨と雲とを蒲田の谷にしきりと投込んでゐる。風が蒲田側にまはらなくては天氣は上らないと、今田重太郎さんは土地つ子らしく叫んでゐる。小屋もゆるがんばかりの襲來に、一同は顏を見合せる。風の凄い呻の中に、かーん、かーんと高い音が淋しく聞えて來る。ピッケル*を重げについて、疲れた足をひきずつて人が近づいて來たのかと思はれ、戸を開けて「いやほー」とでも聲をかけてやりたくなつたが、それは、小石が飛んで、巖にぶつかつてゐるのだとか。雨もしきりに、亞鉛屋根をたゝいてゐる。

穗高の小屋では、今嵐に閉込められた私共二人と、案内の中畠

縱走

蟄居

政太郎、それから上高地から縱走の途にある山好きの青年と、その案内人。あとは、小屋主の今田重太郎さんにその弟の友さん。これだけの人が雲の激怒にせん術なく蟄居してゐる。

「二日も閉込められてしまつた。又明日だつて天氣になるとは思へない。黑田さんどうしますか。」と中畠が言出した。そして、「いつそ唐澤を降りて上高地へ下つてはどうでせう。」と附加へた。「この儘唐澤を下るなんてばかばかしい。いやなこつた。明日は晴れないかなあ。」と獨言のやうにつ

尾根

ぶやくと、重太郎さんは例の大きな聲で、「山は何時まで經つても失くなるものぢやないよ。又の樂しみに少しはとつておいて歸るか。」などと、のんきなことを言つてゐる。私達は、一年に幾日といふお休を、大切に大切に使つて來てゐるのが、山の人達にはわからないらしい。そんなわけで、二日も閉込められると、いらいらして來る。

「明日は何でも出發するよ。」と黑田が言出した。「僕が南アルプスの北岳に行つた日なんか、今日よりずつと凄い荒方さ。立止つてゐるより登る方が、餘程樂なくらゐだつた。」と、さも〳〵蟄居の憂さばらしみたいなことを言ふ。中畠は又案內人らしく、「冗談言つては困ります。唯の道ならいざ知らず、これから先は惡場ばかりです。めつたに人も行かない處、而も尾根だから風に飛ばされてしまひます。」と、たしなめる。皆も暗い燈の下で、中畠

に同感のやうな顏つきをして箸を動かしてゐる。「君達は僕がどんな氣持で山に來てゐるか知らないんだ。見物に來たんぢやないぜ。自分がどれだけ山で出逢ふ困難に堪へられるものかといふことを試すことが、山へ來ることの樂しみの大部分なんだがなあ。樂々と人の踏みかためた道を、荷物さへろくに負はずに歩いては、どこに眞劍味があらう。」「それは一應尤もなお話だが、わたしだつて御客さんの生命を預つてゐる以上は、萬全を期さなくてはなりません。」と言ふ。

一入激しい嵐は、びゆうと小屋をゆるがした。話は途切れて、小屋の夜は更けて行く。山兎を煮た鍋には、僅に赤ちやけた葱と一切の肉とが底にこびりついてゐる。重太郎さんはにこにこと笑ひながら、二人の話を聞いてゐる。私は心ひそかに縱走を續けたいものだと念じつゝ、蒲團に入つた。そして、折角此處

へ來て、而も滿二日も晴れるのを待ちながら、西穗高へ行かれないなんて、考へるだけでも不愉快だ、槍・穗高の縱走くらゐなら、ガイドレスで苦もなく通る、明日のジャンダルムから西穗高があればこそ、中畠を前々から約束しておいたのだと、獨り思ひに耽りつゝ、荒狂ふ風の叫を聞いてゐた。

翌日、霧と風とで息苦しかつた奧穗高の登も、先に行く中畠に接近して登らうといふ心で、足早に進んだ。若し遲れたら弱いと思つて、西穗高へは行つてくれまいといふ心配からである。

小屋から二十分で奧穗高の頂上に著いた。中畠は振向きもせずに、さつさと西へ向つて歩き出した。その時の私の嬉しさ。登山者としての自分を信用してくれた彼に、滿腔の感謝を捧げて續いた。三人は霧の中をジャンダルムへ向つた。あの兜の形をした岩峯の何處を攀ぢるのであらうか、遠くから見たとこ

ガイドレス　案内者なし。
ジャンダルム　穗高岳の難所たる嶮岨なる巨岩。
滿腔

ろでは薄肉の岩のやうだ。まつすぐ下から直接に、中央の岩に取りつくのかしら、面白さうだがむづかしさうだ。手がかりはあるだらうかなど思ひながら、次第に近づいて行くと、霧も次第に薄くなつて來て、はつきりとジャンダルムの岩の一つ一つを見ることが出來た。近よつて見ると、さほどのつぺりとした岩ではなく、切立つたその岩峯には、無數の凸凹があつた。而も登るのは後側からださうだ。後側はそれほど直立してゐない。横から見たジャンダルムは、兜狀でなく、福祿壽老人の頭のやうな形で、稍それが右の方に倒れさうになつてゐる。

この登は、ロープなしで危險を感じない程度のものであつた。少しの勞働で、ジャンダルムの頂に出た。三人が腰をおろすといつぱいになるほどの狹い頂である。煙るやうな霧のひろがりの遙か彼方に浮び出た笠ヶ岳の立派なこと。かすんだ日の遠

ロープ

闘志

スケッチ

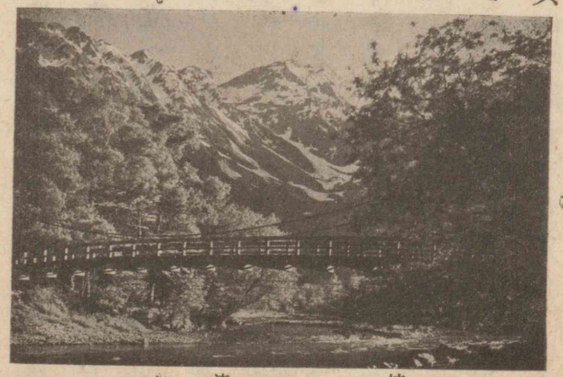
山ほど、美しく優しい感じのするものはない。よく見れば、黑いそれらの連山には、雪の白線さへ刻んでである。あの笠ヶ岳の頂から穂高一群の山々を眺めた時に起つた闘志はどうだ。どの谷から登らう、どの尾根に取りつかうと、新しい登り路を熱心にさがし、一つ一つの谷の入りこみまでをスケッチして、飽きるほど見入つたこの穂高、その大半を普通の縱走道をひつぱり廻されて通つてしまつた今、かうして女性的な山笠ヶ岳を見るのは、何とも言へない氣持である。

穂高岳より槍ヶ岳を望む

さうかうしてゐる内に、又霧が濃くなつて來た。足下には僅

の岩の割目の泥に生命をつなぐ可憐な草が、時折風に倒れさうになつて吹きなぐられてゐる。私共は立上つた。そして西穂高をさして進んだ。天狗の登の急なことも、剝がれ易く又崩れ易い崖の登攀も、却つて緊張味を添へる嬉しさ。クライミング*に伴なふ勞力の多いほどこの山に來た滿足を感じる。西穂高の鋸の刃のやうな痩尾根の上をつたつて進む。こゝ等の岩は脆くて實に危險で、つかまる前に、一つ一つ檢査してからでなくては不安である。とある岩角に手をかけて全身の重みを托す時、若し岩がはづれたらどうなることであらう。ある外國の

クライミング　嶮岨な山路を攀ぢのぼること。



梓の清流

そゝり立つ
雪溪

登山家が岩を抱いて落ちた話など思ひ出す。

遂に晝頃西穗高の最高點に著いた。そこで草鞋を取換へたり、休んだりして、くだりにかゝつた。濃霧の爲に展望のきかなかつたのは誠に殘念であつた。馬の脊ほどもない細い尾根は、幾百米といふ深い谷の底からそゝり立つてゐるのである。岩につかまりながら、連續した惡場をきりぬけて、一時すぎに雪溪の入りこんだところに出た。岳川谷には陽が射して、うす綠の草が美しくゆられてゐる。その雪溪を下つて、上高地に降りるのである。雪と石ころの急坂には歩き慣れた政太郎さへ閉口してゐた。

併し何を言つてもくだりは早いもので、やがて明るい谷へ近づいた。高山植物の花が色とりどりに咲亂れて、ごつごつした岩ばかりを見なれてゐた眼には、いかにも可愛らしく思はれた。

さるをがせ
いで湯

草地を横ぎつて樺の林に入り、倒木をまたいだりくゞつたりして行くと、さら〳〵と水の音がする。渴ききつた三人は思はず清水をすゝつた。顏の汗も洗つた。もう手足を動かしながら、頭では別のことを考へてゐてもいゝのだ。數年前に來た時の上高地の有樣や、都に待つてゐる年老いた父母のことなどを思ひながら、林の中の小徑を下つて行つた。やつぱり美しい上高地。梓川の流は澄みきつて、白砂の底の上を勢よく流れてゐる。鬱蒼とした老樹はゆつたりと風をあしらつてゐる。黑樹にかかつたさるをがせが古風な情趣を與へてゐる。

私共は溫泉旅館について、數日間の汗をいで湯に流し、久方ぶりで浴衣を著た。

—（山の素描）—

安倍能成（ヨシナリ）
松山市の人、哲學者、京城帝國大學教授、明治十六年生。

陰にこもる

たゝずまひ

東塔・西塔
全山を東塔（五谷）西塔（五谷）横川（六谷）の三塔十六谷に分つ、東塔はその中心。

修羅（しゅら）

一八　山の平和

安倍能成

私が夏の一月を過した横川（よがは）は、叡山の中では景色のいゝ所ではない。それは眺望が心持よく開けたといふよりは、むしろ陰にこもつた所である。しかし、私は一月の假の宿として、そんなにいゝ景色を要求しない。年を經た杉や檜の森、物古りた苔路、行く雲、停る雲のたゝずまひ、もうそれで澤山である。何よりもいゝことは、東塔*や西塔*のやうに、訪客の多くないことである。靜かなことは私にはいくら靜かでもよい。物凄いほど寂しくてもよい。毎日毎日混み合ふ電車に搖られて、息づまるやうな思をしてゐる私のやうなものには、休暇の一月は靜肅といふことが何より大事である。

東は修羅（しゅら）西は都に近ければ横川の奥ぞ住みよかりける

慈慧大師
俗姓は木津、法諱は良源、近江國の人、永觀三年寂、年七十四。

官能

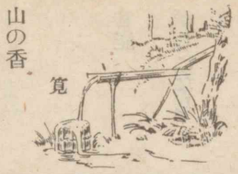
がらになし

晏如

とは、今この寺に祀られてゐる叡山中興の祖慈*慧大師の詠と聞く。私は假の宿ではありながらも、やつぱり大師と感を同じうする。

私のゐる部屋はそんなにいゝ部屋ではない。第一に兩方が板壁と板襖とであつて、バラック式に落著がない。それに本堂の裏手に當るので、あまり明るくない。けれども私はこの部屋の中にあつて、私の靜かな生活を破られぬ心安さに、十分落著いてゐることが出來た。それに私はもう官能や神經の鋭敏さを、がらになく都人士と競爭させようなどといふ愚かな望は棄ててしまつた。三等の車室に尻の痛さを忍び得る力を有することを、寧ろ自分の長所であると考へ出したと同時に、この山の上に粗末な精進料理を食べて、晏如としてゐることの出來る自分

水鷄


山の香。低徊

筧

を、寧ろ惠まれた者と考へてゐる。

始めてこゝに寢たあくる朝の五時頃、私は頻りに鳴きつゞける鶯の聲に眼をさました。やがて本堂の方に讀經の聲が聞えて來た。その時の心持は、まことに靜かな嬉しいものであつた。筧*から落ちる水に嗽いで、そこいらを歩きまはると、まだ露のしとしとと潤うた山路には、苔の香・菌の香・草の香・笹の香・樹の香などをまじへた山の香が、低徊してゐる。山水に快く冷した顏で、この靜かな空氣の中を分けて行く心持を何といはう。

私の山にゐる時は、少し遲かつたのであらう、あの物靜かな寂しい閑古鳥の聲を、曉の山中に聞くことの出來なかつたのは遺憾であつたが、獨りつくづくと机に肱をついて、杉の梢に憩うた雲を眺めてゐる寂しい夕方には、よく水鷄*のたゝくやうな聲を聽くことが出來た。自分の鋭くない眼は、鳥の聲を聽いても、姿

幽寂

樫鳥

はためく

を認めることが出來ない。時々驚いたやうに、ぎやあぎやあと鳴いて、山中の幽寂を際立たしてくれる樫*鳥の姿は目にするけれども、これさへさだかにはその形を捉へ得ない。殊に心憎いのは啄木鳥である。こと〳〵こと〳〵と、部屋から三間ばかり離れた大きな檜や杉の竝木の方角で音がすると知つて、私は幾たびか讀みかけの書物を置いて、跣足のまゝで靜かに窓から飛下り、草叢の中をあちこちと、しきりに高い梢を仰いで、その姿を見定めようとするけれども、その音は私をからかふやうに聞えては止み、止んでは聞えるばかりである。私は遂に目的を達することなく、空しく私の部屋へ歸らねばならなかつた。私はまた雷鳴の響がだんだんと近附き、稻妻の光も時々はためく或日の午後、眼の前の杉の梢に夕立雲の次第に迫つて來て、冷たい風がさあつと吹いて來た時、その雷鳴・風聲の間々に、勤勉なこの鳥

が平氣でこと〳〵といそしんでゐる音を耳にした刹那の靜寂を記して置きたい。

空の晴れた午前に、びいびいと、姿に似げないかはいゝ聲をして鳴く鷹の聲は、いかにも平和に晴やかである。しかし、私はこの鳥の聲を聞く森の諸鳥は、果して如何なる感じを起すだらうかとも思つた。また或雨晴の午後であつた。私は谷を見下す山の一端の朽木の根に踞して、湖の方に眼をやつた。眼の下を一羽の鷹が、恰ものすやうに水平に谷の梢の上を飛んでゐる。それが、檣のやうに諸木の中に聳え立つてゐる杉の梢の一番天邊に、繪に描いたやうにとまつた。私はつくづくと山の平和を讃美したいやうな心持になつた。

—（山中雜記）—

踞す

安樂庵策傳
本名は平林平太夫、笑話作者、寛永十九年歿、年八十九。

奉公人

ひだもの

寒山
唐の隱者、氏名未詳、天台山國清寺の西方寒巖に住し、時々食を乞ひに國清寺に來たり、その寺僧拾得と親交ありき、詩をよくし、寒山詩集世に傳はる。

一九　雷のすし

安樂庵策傳

○

奉公人のはてとおぼしきが宿をかり、四方山の事を語りつくしけり。亭主ほめて「いかさま只の人とは見え候はず、もはや休み給へ。夜著をまゐらせんや。」といふ。「いや、いかほどの野陣、山陣をしても、せう〳〵寒き事をば知らず、無用。」というて、著のまゝいねけるが、夜ふくるにしたがひ、ひたもの寒し。「時に亭主、亭主。こゝの鼠には足をあらはせたるか。」と問ふ。「いや、さやうの事はなし。」と答ふ。「それならば、菰を一二枚著せられよ。鼠が、著た物を踏まば穢なからうに。」と。

○

一人は寒山、一人は拾得と各〻名をいうて出る狂言あり。然る

拾得　唐の奇僧、氏名未詳、天台山の豐干禪師に養育さる、寒山の親友。
神妙
なか〳〵
不審
難波津に……　「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」（古今集の序に見ゆ、作者未詳）
振舞

に、二人連立ちたる先の者、「これは寒山拾得と申す者にて候。」と名告りしかば、次の者言はん事なかりしに、「我等もその連にて候。」

○

神妙にもなき人集りゐける中に一人いふ、「そちたちの中に、雷のすしを食うた人があるか。」「いや、なし。」「さうあらう。稀なものぢやほどに。」「して、そちは食うたか。」「なか〳〵食うた。」「味は甘いか、酸いか。」と問ふに、「ちと雲臭かつた。」

○

何とて芍藥をば歌に詠みたるなきぞと、不審するものあれば、それこそ詠みたる歌あれ。

難波津に芍藥の花冬ごもり今をはるべと芍藥の花

○

振舞の汁に大きに見事なる筍出でたり。人皆「大竹にならんものを、むざと食ひすてんは惜しいな。」と沙汰しければ、さるうつけ「いや竹は大事もない。大木になり、挽物につかふべき松茸をさへ食ふほどに。」

○

「人くらひ犬のある處へは何とも行かれぬ。」とかたるに、「さる事あり。虎といふ字を手の内に書いて見すれば食はぬ。」と教ふる。のち犬を見、虎といふ字を書きすまし、手をひろげ見せけるが、何の詮もなく、ほかと食ひたり。悲しく思ひ、ある僧にかたりければ、「推したり。その犬は一圓文盲にあつたものよ。」

―（醒睡笑）―

うつけ
醒睡笑　八卷、滑稽諧謔の話數百條を收む

より江　姓は久保、松山市の人、明治十七年生。
かな女　本名は長谷川かな、東京市の人、明治二十年生。
あふひ　姓は本田、東京市の人、明治八年生。
立子　姓は星野、東京市の人。
久女　本名は杉田久、鹿兒島縣の人、明治二十三年生。

二〇　好晴

春光や瑪瑙色なる桃のやに　より江
野あそびや飛行機とべば手を叩く　かな女
をちかたに連なる野火や土筆摘む　より江
富士山の花曇して見えぬかな　あふひ
しと〳〵と今日も續くや花の雨　立子
柏餅蒸す竈くらし桐の咲く　かな女
日ざかりの雲も動かぬすだれかな　より江
上陸やわが夏足袋の薄よごれ　久女
風鈴のよく鳴る下に坐りけり　あふひ
夕顔を蛾のとびめぐる薄暮かな　久女
花畑に朝の茶啜る床几かな　かな女

放生會

秋晴や今日箱崎の放生會　より江
好晴や壺にひらいて濃龍膽　久女
つゆくさや飯噴くまでの門あるき　同
舟端の月に仰向く一人かな　あふひ
大木のかげに移りし秋日かな　立子
肩掛に顔まで卷きし夜舟かな　かな女
もあひ傘ぬけて時雨の横町へ　より江
霜柱一日あるや庭の隅　立子
元日や皆近く住むうからどち　かな女
猫に來る賀狀や猫のくすしより　より江
羽子板の重きがうれし突かで立つ　かな女

うから
くすし

今村明恒
鹿兒島縣の人、理學博士、帝國學士院會員、明治三年生。

廢滅

二　地震と震災

今村明恒

我が國は、地震國の名がある程地震の多い國で、古來幾度となく玉敷の都もために廢滅に瀕するやうな大震災を經驗して來てゐる。近くは大正十二年九月一日の關東大震災に於て、東京市だけでも六萬に近い人命と、二三十萬戸の家屋とを亡失したことは、未だ世人の記憶に新しい所である。

されば、人々の地震を恐れることは非常なもので、恐怖の餘り地震と震災とを混同してゐる傾さへある。譬にも、一番動かぬ頼みになるものを大地と言つてゐる。その頼みきつてゐる大地がだしぬけに搖ぎ出すのであるから、この位始末に困る恐ろしいことはない譯である。併しながら、震災を防止することは決して不可能なことではなく、地震に就いての理解と、事に處し

初期微動
主要部
餘震
地割れ

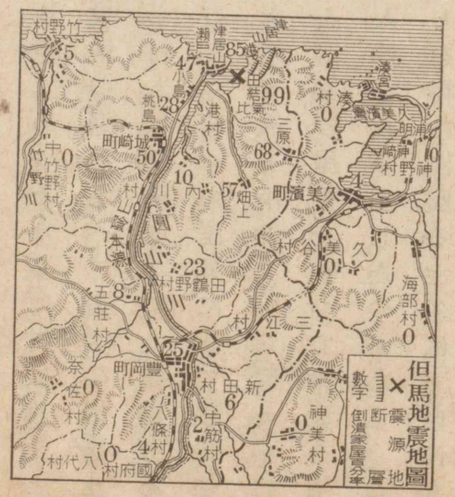
て沈著機敏なるべき不斷の用意とがあれば、その被害は最小の限度に防ぎ止めることが出來る。

地震は最初にビリビリツと輕い振動を感じ、幾秒かの後にユサユサといふ大きな振動が來るのが常であつて、學問上、その最初の小さな振動を初期微動といひ、大きな振動を主要部と名附ける。大地震の場合建築物等を破壞するのは、この主要部であるが、これとても長く續くものではなく、大抵一分間位で微弱となり、次第に消滅するものである。故に如何なる大地震でも、この一分間を凌ぎ得たならば、最早その危險を脫し得たものと看做してよい。餘震は恐れるに足りないし、地割れに吸込まれるなどといふことは絶對にないから、地震その物の與へる損害は、比較的僅少であると言へる。唯恐るべきは、地震に因つて起る火災であつて、その損害は、地震その物の數十倍にも上るのであ

る。殊に我が國に於ては、震災の大部分が火災に基因するものであることは周知の事實であつて、關東大震災に於ける人命財産の損失の九割五分までは、全くこの火災の爲であつた。

それ故一朝大地震に遭遇した折には、何を措いても先づ火災の防止に力めねばならぬ。人命救助も急を要するには違ひないが、先づ火災を防止し、人命の救護はその次とすべきで、これ卽ち人命財産の損害を最少に止める最善の手段である。かの關東大震災を始め、古來幾多の震災の跡を爾後に顧みれば、その災害防止には遺憾とすべき點が多々あつたやうである。特に民衆の團體的防止作業に於て、この憾が多いのであるが、茲に沈著よく變に處し、不撓不屈の精神を以て、勇躍復興の途に上つた模範的な一實例を述べよう。

大正十四年五月二十三日、但馬地方に起つた大地震に於て、城崎の溫泉町は戸數七百二戸の中、半數程潰れた上、五百四十八戸を燒失し、二百七十二人を失ひ、又、豐岡町は二千百七十八戸の中、千四百八十三戸を燒失し、八十七人の死者を出した。この時、港村田結部落は、その位置が震源の直上にあつた爲、地震は激烈を極め、最初から五秒と經たない中に、全村八十三戸の中、八十二戸は全潰し、中六十七戸は直潰れに潰れたのであつた。これが爲、村人の中六十五人はその下敷になつてしまつた。



時あたかも蠶の掃立日に當り、各戸とも盛に火を起してゐた折とて、潰家からは處々噴煙を始め、瞬く間に三ケ所から燃上つ

直潰れ

阿鼻叫喚
焦土

た。折柄餘震は轟々と相次いで襲來し、壓伏された人達は救助を叫ぶなど、平和の樂土は一變して阿鼻叫喚の巷と化した。若しこの時、村人が周章狼狽して無策であつたならば、村は焦土と化し、多數の死者を出し、凡そ震災地の遭遇すべき最大の慘害を現出したであらう。併しながら村人は沈著であつた、賢明であつた、さうして訓練が行屆いてゐた。苟くも屋外にゐて手足の自由な者は、異口同音に「先づ火を消せ、火を消せ。」と叫び、瞬く中に火を揉消し、更に煙を上げてゐる潰家の屋根を破つて火元を消止め、時を移さず下敷になつた人達を救ひ出したのである。これが爲、五十八人は無事なることを得たが、殘る七名は下敷になつた瞬間に致命傷を被り、如何に速かに救助の手が廻つても、到底助かる見込のない不運な人達であつた。かくして田結の部落は、地震國日本の經驗し得る最强度の地震に襲はれながら、罹

僻陬
烏有に歸す

災の程度は附近の町村に比し極めて輕かつたのである。

一體田結といふ所は半農半漁の部落で、海には海産物が豐富であり、陸には柳行李の原料たる柳苗の栽培が盛で、自然には惠まれてゐる方である。加ふるに村人の勤勉努力は、北但の僻陬にありながら、比較的有福な樂土を築上げてゐたのであるが、今から二十年程前の或日、男子出漁の間に火を失して、一部落烏有に歸したことがあつた。それ以來、村では婦人消防隊を編成し、後にはガソリンポンプの用意までするに至つた。母や姉が消防の練習をすれば、子供達も自然これに倣ふ道理で、田結部落は老幼男女悉くが防火の團體訓練を積んでゐた。彼等が震災時に於て、瞬時にこの最善の處置を執り得たのは、全くこの訓練の賜物であつたのである。

余は地震學に志してから既に四十年、この間震災地を見學し

段違ひ
地物變動

た回數は數へ切れない。この時も四五の人々と共に視察に赴いた。時は五月二十八日、田結の部落に到著して、見れば一村全滅、一見してこれまで調査した町村中最も激烈であつたことが推測せられたが、唯火災のなかつたのは何よりの仕合と感じた。その中、大きな地割れや段違ひなどが見えるので、本格的な斷層もありさうに思はれたから、余は一人の青年に向つて「かく〳〵の地物變動に氣附かないか。」と尋ねると、やがて青年團長を伴なつて來た。余が近づいて發問しようとすると、先方は驚きの眼を瞠つて「今村先生ではございませんか。私は關東大震災の頃、某大學に在學して

地震直後の田結部落

ゐて、その節、先生の御講演を度々拜聽致しました。」といふ。余は知人を得た喜びの中にも、今回の不幸に對する慰藉の辭を述べ、例の斷層に就いて質問した。すると「あります、あります。三田野といふこの北の方の臺地で耕作してゐた一人が、あの地震と同時に、畠を横切つて斷層が出來た珍事に仰天して、農具もそのまゝ村まで飛んで歸つたさうです。」と言つて、使を走らせてくれた。その待つ間の小閑を利用して一問一答、前述のやうな地震美談を聞くことが出來たのである。

彼は更に語を續けて「こちらでお休み下さいと御案内申すべき所ですが、御覽の通りの潰れ方で、使へる家もありません。併し御安心下さい。震災がかく輕かつたので、各方面からの救助や慰問品等は一切お斷りして、震災のもつと激しかつた他の町村にお讓りし、本部落だけは自給自足に依つて復興に力めてゐ

自力更生

ます。」と極めて朗かに自力更生を主張するのであつた。　余はこの村の人々の模範的な行動を聞いて、恰も寶物を探し當てたやうな喜びに打たれたのであつたが、この健氣な態度には、再び「何たる快い、さうして氣高い心の人達であらう。」と歎聲を洩さざるを得なかつた。　余は後年「日本にも田結の村人の如き人々があるではないか。」と聲を大にして叫んだことがある。　それは、昭和五年七月伊太利中部大地震に關して、伊國政府が他國からの慰問を謝絶して來た時、或人が頻りにこの事を感歎したのに對し、この言を以てこれに酬いたのである。

やがて三田野の斷層目擊者も見えたから、我々は地圖を開いてその場所を確め、彼等の好意を謝して別れを告げようとすると、彼等は、その目擊者に今一人を加へて案内に立たせようといふ。　我々は自給自足の妨げとなるのを慮り、百方辭退したが、彼等は「我々の自給自足は村だけのことです。　貴方がたの任務は、今回は勿論將來の地震につき、その災害豫防の基礎となるべき大事業ですから、我々にも應分の奉仕をさせて頂きたい。　どうか御辭退なきやうに。」といつて、混亂多忙の折にもかゝはらず、終始好意と理解とを以て、我々の任務を援助してくれた。

田結の人々がかくの如き激烈な地震に襲はれながら、災害防止上模範的な行動を取つたことは、まことに歎稱に堪へない所で、その上、極めて朗かな氣持を以て自力更生に當つた健氣さ、地震に對する理解の深さ、その研究に對して示してくれた親切、余は過去四十年の間、かやうな感ずべき罹災民を他に見たことがない。　一行の誰もが、別れに臨んで適當な感謝の辭を見出すに苦しんだであらうが、余は全く言葉もなく、唯心に彼等の前途を祝福するのみであつた。

養和元年　皇紀一八四一年。
あらたまの　一萬　曾我十郎祐成の幼名。
箱王　曾我五郎時致の幼名。
いざさせ給へ
曾我殿　曾我太郎祐信、曾我兄弟の養父。
工藤一臈　工藤祐經。

三　曾我兄弟

一　空ゆく雁

頃は人皇第八十一代安德天皇の養*和元年、あらたまの年立返り、一*萬は九つ箱*王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯(たはぶ)れながら、「いかに母御前、父御前は何處におはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きて拜み奉らばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりに思はれて、母泣く泣く宣ひけるは、「あの曾*我殿こそ、おのれ等の父にてあれ。」と心强く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前はまことやらん、『狩場より歸り給ふ道にて、工*藤一臈とやらんに射られて死に給ひぬ。』と兄御前は語らせ給ふぞや。

鎌倉殿　源頼朝。
きり者
この里　神奈川縣足柄下郡曾我中村。
おとなし

當時鎌*倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこ*の里に在りと知らでや、過ぐらん。」などおとなしく語りければ、母よりはじめて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

幼き曾我たち（横尾芳月筆）

かくて夏も過ぎ、秋も闌(た)け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶ翼も、皆別の翼ぞ交へざる。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類すらかくの如

人倫

河津殿　河津三郎祐泰。

小賢し

和上萬

薄刎

遠侍

し。我等は人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我等より幼き者にても、馬・鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れてさめざめと泣きければ、弟も小賢しく顔を合はせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上萬達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とくとく入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人の者は門外に逃出でて、飽くまで泣きて後に内に入りにけり。

或時、兄弟は竹の小弓に薄刎の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつしか成長し、和殿は十三、我は十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人々思ひけり。

明障子

領掌

曾我物語　十二卷又は十卷、曾我兄弟の復讐の顛末を記せる物語、作者未詳。

—（曾我物語）—

二　小袖曾我

ツレ　曾我兄弟の母
シテ　曾我十郎祐成　ツレ　家人鬼王
ツレ　曾我五郎時致　狂言　春日局
ツレ　家人團三郎

四人　シテ十郎祐成・ツレ五郎時致・家人團三郎・同鬼王の四人。

勘當

星月夜　鎌倉の枕詞。

鎌倉殿　源頼朝をさす。

人知れぬ……「人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」（源頼政）

四人謠「命牡鹿の隱れ里、命牡鹿の隱れ里。富士の裾野を狩らうよ。シテ詞「これは曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候間、我等も罷り出で候。またこれなる時致は、母にて候者の勘當にて候程に、申し直し連れて御狩に罷り出でばやと存じ候。

四人謠「時しも頃は建久四年、五月半ばの富士の雪、五月雨雲に降りまぜて、鹿の子まだらや群山の、裾野の鹿の星月夜、鎌倉殿の御狩の御遊げにたぐひなき御事かな。シテ謠「東八箇國の兵ども、皆御供に參るなれば、四人謠「定めて敵の祐經も、御供申さぬ事あらじ。たとひ討つまでの、事は夏野の鹿なりとも、狙ひて見ばやと大丈夫の、狩人に紛れうち出づる。人知れぬ大内山の山守も、木隱れて、それとは見えじ梓弓、それとは見えじ梓弓。矢頃にならば鹿よりも、祐經を射とゞめて、名を富士の嶺に揚げばやと、思ひ立ちぬる狩衣、たとへば君の御咎、よしそれとても數ならぬ、身にはなか〳〵恐れなし、身にはなか〳〵恐れなし。シテ詞「これに暫く御待ち候へ。某參りて案内申さうずるにて候。如何に案内申し候。狂言詞「誰にて御座候ふぞ。や、祐成の御參りにて候。シテ詞「さん候。某が參りたる由申し候へ。狂言詞「畏つて候。大方殿よりの御諚には、祐成の御參りならば申せ、時致の御參りならばな申しそと仰せ出されて候。シテ詞「唯某が參りたると申し候へ。狂言詞「如何に申し上げ候。祐成の御參りにて候。母詞「此方へと申し候へ。あら、珍らしや十郎殿。いづくへの序ぞや。母がために態とはよも。シテ詞「さん候。久しく參らず候程に向顏のため、または富士の御狩と申し候程に。母謠「さればこそ思ひし事よ、君がため、御狩に出づる序ぞや。シテ謠「いつしか親子の御戯れ、珍らし顏に羨ましやと、時致謠「思ひながらも時致は、不孝の身なれ

高間の山の……「よそにのみ見てやみなん葛城や高間の山の峰の白雲」（新古今集、讀人しらず）

ば物の隙より、地謠「高間の山の峰の雲、よそにのみ見てや止みなん。同じ子に、同じ柞のもり乳母、同じ柞のもり乳母。隔てなくこそ育てしに、さも引きかへて祐成には、いろ〳〵のおもてなし御祝ひごとのお杯。たとへば時致は、後に生れしばかりなり。正しく同じ子の身にて、御覺え葦垣の隔てあるこそ悲しけれ。

日本一

シテ詞「日本一の御機嫌にて候。あれへ御參りあつて、春日の局を以て申され候へ。時致詞「某が事は御機嫌いかゞ計り難く候間、まづまづ參り候ふまじ。シテ詞「唯某に御任

春日の局　兄弟の母の侍女。

寛永本浮瑠璃小袖曾我挿畫

春日野の……「春日野の飛ぶ火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜つみてん」（古今集、讀人知らず）

國上の禪師　曾我兄弟の弟、乳の中より別れ、越後國國上に出家す。

えせ者

うたて　几帳

せあつて、急いで御參り候へ。時致詞「如何に春日の局、時致の參りたる由それ〳〵申し候へ。謠「いつしか守乳母まで、心變りし春日野の、飛火の野守、出でてだに見候はぬぞや。詞「時致が參りたる由それ〳〵申し候へ。

母詞「あら不思議や。祐成は只今來たりぬ。國上の禪師は寺にあり。それならでは子はなきに、時致といふは誰そ。や、思ひ出だしたり、箱根の寺にありし箱王といひしえせ者か。それならば母が出家になれと申ししを聞かざりしほどに勘當せしに、おしてこれまで來たれるは、なほ重ねての勘當とや。伊豆・箱根・富士權現も御覽ぜよ。なほこの後も勘當と、時致謠「御誓言に蔀遣戸を、地謠「立てそへられて茫然と、やる方もなきこの身かな。うたてやせめて今一目。御簾・几帳も下りたり。あら情なの御事や。シテ謠「祐成は、かくとも知らで時致が、時移りたり、事よきかと、

かせき

仔細

中門を見やりつゝ、早此方へと招けば、時致謠「招かれて山のかせき、地謠「泣く泣く來たりたり。打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず、なつかしければ去りやらず。シテ詞「さて御機嫌は何と御座候ふぞ。時致詞「以ての外の御機嫌にてなほ重ねての御勘當と仰せ出だされて候。

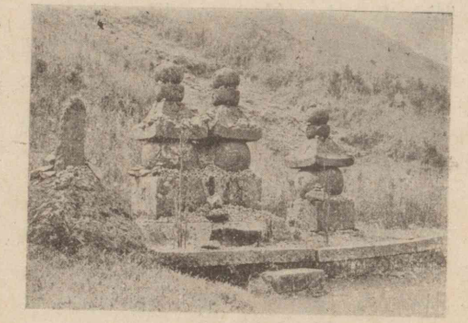
母詞「如何に誰かある。狂言詞「御前に候。母詞「致時が事を申さば、祐成ともに勘當と申し候へ。狂言詞「畏つて候。如何に申し候。時致の御事を御申しあらば、祐成ともに御勘當と仰せ出だされて候。シテ詞「まづ畏つたると申し候へ。某存ずる仔細の候間、この度は同心にて申さうずるにて候。時致詞「いや〳〵某は參り候ふまじ。シテ詞「唯御參り候へ。如何に申し候。我等が親の敵の事、世に隱れなく候處に、餘りに便なく候間、時致が事を申し直し、連れて御狩に出づべき處に、時致が事を申さば祐成ともに御勘當

郎黨

弘法同宿

と候ふや。よく〳〵これを案じ見るに、謠「總じて祐成をも誠は思ひ給はぬぞや。地謠「たとひ時致出家の暇を申すとも、兄祐成に郎黨もなし。しかも身に思あり。おのれらさへに見捨つるかと、却つて御叱り候ひてこそ、慈悲の母とも申すべけれ。シテ謠「それに時致を法師にならぬとの御勘當。たとひ仰せに從ひ、出家仕り候ふとも、地謠「我等が事は世に隱れなし。あれ見よ、河津が子供こそ敵を遁れんとの出家、正しく弘法のためならずと、同宿も思ひ賤しまば、心も染まぬ墨衣の、浦島が子の箱根寺にて、明暮くやしと思ふならば、なか〳〵俗には劣るべし。

地謠「時致は箱根にありししるしに、法華經一部讀み覺え、常は讀



曾我兄弟の墓

回向

赤澤山　靜岡縣田方郡にあり。

誦し、母上の現世安穩、後生善所と祈念する。　または毎日に六萬遍の念佛、父河津殿に回向する。　かほどに他念なき身を、この三年不孝蒙る。　恩顏を拜せねば、御戀しさも一つ。　または狩場への門出、御暇ごひしさ一方ならぬ望なり。　大方、治る御代なれども、狩場や漁に不慮の爭もあるものを。　兄弟二人謠「その上我等は狩場に於て例惡しし。

地謠「昔を思ひ伊豆の奥の、赤澤山の狩くらにて、父も失せさせ給はずや。　今とても、狩場とあらばなどしも、御心には懸けざると、恨み顏にも兄弟は、泣く泣く立つて出でければ、母謠「母は聲をあげ、あれ留め給へ人々よ。　地謠「不孝をも勘當をも、許すぞ許すぞ時致とて、泣く泣く出でさせ給へば、　兄弟二人謠「兄弟は嬉し泣きに伏しまろべばや。　地謠「見る人も思ひやりて泣き居たりや。

母詞「祐成申すによつて、時致が勘當許すにてあるぞ。　近う來たりて、狩場への門出祝ひて御入り候へ。　シテ詞「如何に時致、近う參りて、この年月の御物語申し候へ、さるにても、　地謠「この程時致が、盡す心に引きかへて、今はいつしか思ひ子の、母の情有り難や。　餘りの嬉しさに祐成、お酌に立ちてとりどり時致とともに祝言の、　地謠「歌ふ聲、　兄弟二人謠「高き名を、雲井に揚げて富士の嶺の、　地謠「雪をめぐらす舞のかざし。（三人男舞）

地謠「舞のかざしのその隙に、舞のかざしのその隙に。　兄弟目を引き、これや限の親子の契と、思へば涙も盡きせぬ名殘、牡鹿の狩場に遲參やあらんと、暇申して歸る山の、富士野の御狩の折を得て、年來の敵、本望を遂げんと、互に思ふ瞋恚の焰。　胸の煙を富士おろしに、晴らして月を清見が關に、終にはその名を留めなば、兄弟親孝行の例にならん嬉しさよ。

瞋恚の焰

清見が關　靜岡縣庵原郡にあり。

—（觀世流謠曲）—

平福百穗　名は貞藏、秋田縣の人、畫家、昭和八年歿、年五十七。

溫容

○二三　獨創の國日本

平福百穗

歐羅巴を一めぐりして來て、つくづくと日本に生れたことをしあはせに思つた。それは、非常に豐富に、自然に惠まれてゐることだ。無論、歐羅巴の自然には、日本の自然にはないところの大陸味はある。けれども四季の移り變りをはじめ、日本ほど自然から享けてゐるものの豐富な國は、世界にまたとあるまい。樹木・草花・果實に至るまで、その種類の多いことは、いはば熱帶から寒帶に至るまでのものが揃つてゐるのだ。山や川や海にしても、島國の常として、規模の雄大といふ點になれば歐洲大陸に劣るが、溫容あつて麗しく、しつとりと潤のあることは、これ又世界に冠たるものである。隨つて古來我が國民は、自然に抱擁され、自然に親しみつゝ生活して來てゐるのであつて、それは我々

氣韻

の風俗や習慣を一目すれば明らかである。

これに反して西洋のものは、總てが自然との交渉が薄く、氣韻や餘裕などを尊重するよりも、理詰で納得出來る方を擇び、極めて人事的方面に發達して來てゐる。自分の專門の繪の方から見ても、西洋では、古い繪といへば、十四世紀頃からのものが殘つてゐるが、それは殆ど皆宗教や神話に關するもの、つまり宗教畫がまづその全部を占め、風景畫や靜物畫などは、近世になつてやうやく發達したのである。それまでの繪は、總て人事的で、東洋の繪のやうに、古くから景色や花鳥や獸類などの自然を取扱つたものは、殆どないといつていゝのである。

併し、風景畫や靜物畫が發達したといつても、その取扱ひ方もやはり西洋流で、東洋に於けるやうに、動物でも鳥でも花でも、自然を樂しむ、つまり鳥や動物等と同化して取扱つてゐるといふ

風なのは、ないと斷言出來ないまでも極く稀である。例へば、鳥を描くにしても、鐵砲で打殺したのをぶら下げて置いたり、机の上に他の靜物と一緒に置いたりして取扱つてゐる。花にしてもさうだ。我々東洋人は、雨に傾いてゐるとか、露を含んでゐるといふ風に、詩情を以て取扱つてゐるが、西洋人は、たゞ色の材料として取扱つてゐるに過ぎない。詩と現實と！我々は果して何れを取るべきであらうか。

歐羅巴の、往來を歩いてゐる婦人を見ても、或は流行品を飾りたててゐる百貨店などの飾り窓を見ても、美を競ひ粹を爭つてゐる筈の婦人用の著物が、模樣にしろ、色彩にしろ餘りに單調で、貧弱なのに意外の感に打たれる。小さな持物や工藝品にしても、非常に單調で變化に乏しいのだ。誰も眼につくやうな極めて複雜な模樣のものもあるにはあるが、模樣として大して價値

哲學的

審美眼卓拔

あるものとは思へない。

然るに、一度日本の地を踏んで、往來の婦人の帶なり著物なりを見ると、その色彩と模樣の餘りに多種多樣なことは、他の國々ととても比較が出來ない。それといふのも、周圍の自然が、樹木の種類、四季に咲く花、山川海等、往來を歩いても旅行しても、寧ろ餘りに變化の多きに驚かしめるほど豐富なせゐである。總てが詩とか哲學的なものを含んでゐるからである。西洋の山は、日本の山のやうに森とした――などといふ形容詞を使へたものではなく、總てが薄つぺらである。從つて、美しい豐饒な自然に育まれて來てゐる日本人の審美眼の卓拔なのも、無理はないと肯かしめるのである。

手工藝品なども、小手先の器用と、この審美眼とのために、精巧なことは遙かに歐洲諸國をしのいでゐる。紙の美しさ、硝子細

高雅

前提
母胎

工の巧みさ、陶器の高雅さ、その他、セルロイドの玩具や三足一圓ぐらゐの靴下、パナマ帽なども、どしどし西洋へ輸出されて、徒らな西洋崇拜の日本人が、屢〻得意になつて外遊土産として來るところである。

日本人は聰明だ、感受性が強い、一見して摸倣性に富むが如くであるけれども、その鋭い頭腦は、如何なる混亂の中にあつても、さらに新しい獨創にまで到達する能力を持つてゐる。我が日本人は、何故に西洋人より劣るものとして、一にも二にも卑下するのか。日本を知る西洋人こそ、かへつて日本を恐れてゐるではないか。宗教を見よ、醫學を見よ、化學を見よ、何れも摸倣して、以て先進國をしのいでゐるではないか。目下日本は、國を擧げて摸倣し、動搖し、混亂してゐるかに見える。併し、これはやがて獨創へと踏出す前提であり、その母胎であるのだ。

—（日の出）—

下田歌子
岐阜縣の人、女流教育家、實踐女學校長、昭和十一年歿、年八十一。

天與
凜乎
風格

二四　野村望東尼

下田歌子

望東尼は、文化三年九月六日に、筑前福岡の藩士浦野重右衛門の第三女として生れました。由來福岡藩士は、藩主黑田家祖先傳來の遺風によつて、質朴・剛健の氣風を尙び、尙武・勤儉氣節を重んじ、謹嚴高潔な家風を尊んだものであります。浦野家の家風は、その中でも最も勝れたものであつたと、その當時に聞えてゐました。

望東尼は、幼時からかういふ氣風の家に人となつて、純然たる武士道的教育を受けたのであります。天與の美質は、この凜乎たる教育の力によつて、一層その光を增しました。「彼女の容貌は優婉花のやうな中に、犯すことの出來ない風格を具へてゐて、相對する人はその何ともいひ知れぬ氣品に威壓されて、おのづ

風趣流露眞摯

から尊敬する念慮を起すやうになる。」とは、直接彼女に接した人の直話であります。

彼女はまた好んで文學を研究しました。その和歌は一種の天才ともいふべく、風趣が凡俗を拔き、眞情が三十一字の中に流露してゐます。文章もまた簡潔眞摯、往々古大家の文にも劣らぬものがあります。有名な姫島日記を見ても、自分の子女に送つた消息文を見ても、文といひ思想といひ、群を拔いてゐます。この武士道的教育を受けた婦人、この天才的文學者とも讃美すべき婦人が、始めて家庭の人として一家に主婦たる任務についたのは、その二十四歳の時でした。

彼女の良人は、同藩士の野村貞貫といふ人でありました。祖先以來黑田家譜代の臣で、忠誠剛毅、しかも文才に富んだ立派な武士であり、藩中から尊敬と囑望を以て見られてゐた人であり

囑望

時代思潮

ました。不幸にして妻と死別し、三人の幼兒を抱いて、公務と家庭を雙肩に荷つて、非常に困難してゐたのを、或人の媒介で、彼女を迎へて後妻にしたのでありました。

始めて家庭の人となつた彼女は、世間から興味と期待を以て眺められました。それは、良人貞貫は公務のために身を碎き、特に時代思潮を看破して、竊かに勤王攘夷の說を唱へ、その方に熱中するあまりに、家のことなどは念頭にもかけないで、全くその妻に打任せてゐたし、それに彼女が野村家に嫁いだ時には、三人の子供はどれも頑是ない年齡である上に、慈愛の深い母の懷を離れてから、久しく嚴格一方の父の手に育てられ、それも多くは放任されてゐたところから、三人とも、執拗な我が儘な、一種ねじけた根性に傾いて、雇女などの手にはおへない腕白兒となつてゐたからでありました。

執拗

ところが、望東尼が入輿してしばらくたつうちに、この腕白兒も執拗兒も、いつの間にか彼女の膝に縋つて、嬉々として樂しむやうになりました。實際うみの母に對しても、かうまではあるまいと思はれるほどに、懷き親しみました。頑固な性質もいつとなしに失せて、美しい優しい性質となりました。そして、母の教を力草に、朝夕學問・武藝を勵むやうになりました。中にも、長男貞則は、長じて藩中第一の正直者・誠忠者・廉潔者といふ名を得て、お目附に拔擢せられるほどになりました。

どうしてあゝもよく子供達を懷けたかと、人々から質問を受けると、彼女は笑ひながら、「懷けようなどとは思ひません。我が子ではありませんか、懷くのが當然です。」と答へたさうでありますが、畢竟誠意が人を感動させたといはなければなりません。

彼女はよく子供の性質を觀察してゐて、子供に干渉したり、無理じひしたりはしませんでした。また子供の性癖を矯めるについては、最も短氣を警めました。即ち、半月や一月、乃至三月・五月に、その惡癖を矯めようなどとは思はないで、一年・二年を期して、漸次にこれを矯正したのであります。彼女は子供の惡癖を口汚く罵らないで、自然に自分でこれを悟るやうに仕向けました。即ち、彼女は常に子供の最も喜ぶ犬猫その他の動物の話や、昔噺や、歴史物語などをして聞かせ、または忠孝・節義を說いて、それとなく日常の行儀作法上の惡癖を正しました。かうして彼女の家庭教育は見事に成功しました。即ち、貞則は一藩の模範となり、次子助作は勤王の大事に奔走し、遂に國難に殉じて正五位を贈られ、靖國神社に合祀されるといふ榮譽を荷ひました。

彼女は何一つ行屆かないところがないほど趣味が廣くありました。その廣い趣味を家庭内に發揮して、趣味の家庭を作り

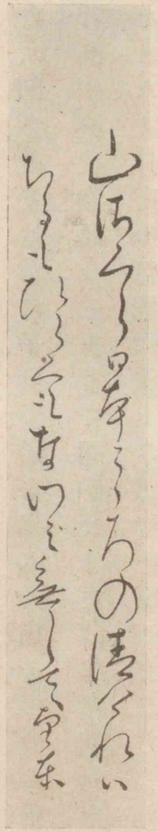
閨秀

大隈言道　筑前國の人、歌人、明治元年歿、年七十一。

向陵集　一卷、野村望東尼の家集。

山さくら日本こゝろの清けれはちるもひらくもなつみ無して　望東

出したことも、その一特色といつてよいでせう。和歌・文章に於ては、彼女は確に當時一流の閨秀文學者でありました。二十七歳の時、良人とともに、當時の歌人大隈言道翁の門に入りましたが、彼女が師から著目されてゐたことは、向陵集の序によつて知ることが出來ます。また家庭にあつては、料理法に獨特の伎倆を揮ひました。常に人に向つては、夫が善くない遊に心を移すのは妻の罪である。妻がよく夫の性格・趣味を了解し、これに應じて家庭を愉快にすると、夫は決してそんなことをするものではない。これについて最も注意すべきは料理である。」と語りました。彼女は常に在來の材料を用ゐて、種々樣々の變化ある料



野村望東尼筆蹟

理を作つて、家人をしていつでも新しい珍らしい食品を味はうてゐる思をさせたさうであります。また家庭に應用すべき繪畫・生花・點茶・刺繍・押繪など、何一つ通じてゐないものはありませんでした。そして、これを種々に應用して、いつも家庭を明るい樂しい忘れがたいものとして、夫や子供の樂園としました。今日彼女の遺物として殘つてゐる繪畫・筆蹟・刺繍・押繪などを見ても、これがあの雄々しい勤王家のした仕事かと驚かれるほど精巧なものがあります。

綽々

これを要するに、彼女は家庭の人として最も成功した人であります。彼女の大きい才能には、家庭の整理・育兒の事業などをするのにも、綽々として餘裕があつたのであります。そしてその餘裕を利用して、彼女は歴史を學び、和漢の學を究め、これによつて勤王愛國の大精神を修養したのでありました。—（日本の女性）—

北村透谷　名は門太郎、神奈川縣の人、詩人、明治二十七年歿、年二十七。

五情　沒了

二五　秋窓雜記

北村透谷

かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるによけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を醉はしむると、月の人を清ましむるとは、自ら味を異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは、世俗の免かるゝ能はざるところながら、われは萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを撰ぶなり。

北村透谷

病みて他鄕にある人の身の上を氣遣ふは、人も我もかはらじ。されど我は、常に健全なる人のたまゝ床に臥すを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは、富めるものゝ道に入り難きに等しからん。世には體健かなるが爲に、心健かならざるもの多ければ、常に健かなるものの十日・二十日病床に臥すは、さまで恨むべき事にあらず。ましてこの秋の物色に對して、命運を學ぶにこよなき便あるをや。かく我は眞意を以て、微恙ある友に書遣れり。

こよなし　微恙

欣樂　世の心

夜更けて枕の未だ安まらぬ時蟋蟀の聲を聞くは、眞の秋の情なりけん。その聲を聞く時に、希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲・鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書・古文のみ物の理を敎ふるにあらず。一蟋蟀の爲に我は眠を惜しまれて、物思なき心に思を宿しけり。

—（北村透谷集）—

山本一清　滋賀縣の人、天文學者、理學博士、明治二十二年生。
運行
神祕的
特權
テニソン　イギリスの詩人。（西暦一八〇九―一八九二）

二六　星の光

山本一清

星の光は、これを仰ぎ見る人の心に眞摯の情を養ひ、又その整然たる運行は、これを知る人の爲に、嚴肅の思を喚び起すものであるが、大星小星の神祕的な配列によつて誘はれる星座の親しみは、吾人に眞の美と眞の愛とを味ははせる。天は僞り無きもの、嚴かなるものであるを知ると共に、星の輝が誠に愛すべきものであると感ずる幸福は、星好きの者に與へられた特權である。

星を見ることの樂しみは、洋の東西や國の如何によらない。又老幼の差や、男女の別によつても違ふものでない。凡そ如何なる人々の間にも、同じ星を愛する心を持つことによつて、喜ばしい友情を結ぶことが出來る。テニソンの詩の中に、

幾晩も幾晩も、向うの藤のからんだ窓のかなた

オリオン　星座の名。
プレヤデス　星座の名、すばるのこと。
タゴール　インドの詩人、哲學者。（西暦一八六一年生）

から、私は休の床に入る前に、大オリオンが靜かに沈み行くのを見たことがある。

幾晩も幾晩も、よく澄んだ暗黑から上つてくるプレヤデスが、銀の紐で結ばれた螢の一團のやうにちらついてゐるのを見た。

とあるのは、吾々も詩人と感を同じうするところである。

更に又、印度の詩聖タゴールが「春の周轉」の中に、

眞夜中に星々が
空に浮ぶは何のため。
こちの世界へ歸つて來い、
街の燈火にしてやらう。

と歌つた心は、小兒の心のみでなく、大人の心をも動かすに十分である。見る眼を以て見れば、星には心がある。輝の大小、色調

の青赤など、恰も笑ふが如く、泣くが如く、嚇すが如く、怒るが如く、更に又、媚びるが如く、慕ふが如きものもある。殊にちら〳〵と閃の速さ緩さを眺めると、或時はそれが跳るかのやうに、又或時は、見る者に喃々と話しかけるかのやうである。

純潔と崇高とは、星の光の持つ魂である。見る人の心をこれによつて淨化せずには止まない。こゝに眞の美が生れる。美とは客觀のみではない。又、主觀のみではない。主と客と(心と星と)相結んでこそ、美の精を生むものといはねばならない。

エマーソンの言に、「若し星が千年に一夜だけ現れるものならば、こゝに表された神の都の記憶を如何に人々は信じ、あこがれ、又後の世の代々まで傳へることであらう。」とある。毎夜見うるが故に美を感じないとしたならば、その人の心の弛みである。文人はそれを「神を瀆すもの」といふのであらう。

—(星座の親しみ)—

喃々

客觀　主觀

エマーソン　アメリカ合衆國の詩人、哲學者。(西暦一八〇三—一八八二)

文人

二七　吉野哀史

一　櫻井の訣別

尊氏卿直義朝臣、大勢を率ゐて上洛の間、要害の地に於て防ぎ戰はんために兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬をまゐらせて內裏に奏聞ありければ、楠木判官正成を召されて、「急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力をあはせて合戰を致すべし。」と仰せ下されければ、正成畏まつて奏しけるは、「尊氏卿已に筑紫九國の勢を率ゐて上洛し候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。味方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に懸けあつて、尋常の如くに合戰を致し候はば、味方決定打負け候ひぬと覺え候ふなれば、新田殿をも唯京都へ召され候うて、前の如く山門へ臨

櫻井　大阪府三島郡本村の大字。

早馬

機に乘る

尋常

山門　比叡山延暦寺をさす。

河尻　淀川河口をさす。
搦手
料簡
いひがひなし
公議
軍旅
僉議
節度使　新田義貞をさす。

幸成り候ふべし。正成も河内へ罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて兵糧をつからし候ほどならば、敵は次第に疲れて落下り、味方は日々に隨つて馳集り候ふべし。その時に當つて、新田殿は山門より押寄せられ、正成は搦手にて攻上り候はば、朝敵を一戰に滅す事ありぬと覺え候。新田殿も定めてこの料簡候ふとも、路次にて一軍もせざらんは、無下にいひがひなく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戰は、とてもかくても始終の勝こそ肝要にて候へ。よく〳〵遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。」と申しければ、「誠に軍旅の事は兵に讓られよ。」と、諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申す所もそのいはれありと雖も、征伐のために差下されたる節度使、未だ戰をなさざる前に、帝都を捨てて、一年の中に二度まで山門へ臨幸ならん事、かつは帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ所なり、たとひ尊氏筑紫勢を率ゐて上洛すとも、去年東八箇國を從へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戰の初より敵軍敗北の時に至るまで、味方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻靡けずといふ事なし。これ全く武略の勝れたる所にはあらず、唯聖運の天に叶へる故なり。然れば、唯戰を帝都の外に決して、敵を鈇鉞の下に滅さん事、何の仔細かあるべきなれば、唯時を替へず、楠木罷り下るべし。」とぞ仰せ出されける。正成、この上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都をたつて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

去年　建武二年。建武中興成り、尊氏軍功第一を以て賞せられしも、猶慊らざる所あり、東下し輿衆を率ゐて、京に攻上りしが、官軍能く戰ひ、尊氏筑紫に奔りたり。
鈇鉞
庭訓

正成これを最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より河内へ歸し遣すとて、庭訓を遺しけるは、獅子子を產んで三日を經る時、數

機分

教誡

將軍　足利尊氏をさす。

養由　養由基、楚莊王の臣、弓の名手。

紀信　漢の高祖の臣、滎陽に於て高祖の身代となりて死す。

百里奚　字は井伯、秦の穆公に仕へし賢相。

千丈の石壁よりこれを擲ぐ。その子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳返りて、死する事なしといへり。況や汝已に十歳にあまりぬ。一言耳に留らば、我が教誡に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見ん事、これを限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の世になりぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死殘つてあらんほどは、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來たらば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣く泣く申しふくめて、各〻東西へ別れにけり。

昔の百里奚は、穆公、晉の國を伐ちし時、戰の利なからん事を鑑みて、その將孟明視に對つて今を限りの別れを悲み、今の楠木判

前聖後聖　「志を得て中國に行く、符節を合するが如し、先聖後聖其の揆一なり。」（孟子）

太平記　四十卷、吉野時代に成りし戰記物語、後醍醐天皇文保二年より、後村上天皇正平二十二年迄五十年間の出來事を描く、作者未詳。

北畠親房　權大納言師重の子、吉野朝の忠臣、正平九年歿、年六十三。

五月　延元元年。

元弘の時の主上　光嚴院。

豐仁　光明院。

官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びん事を憂へて、その子正行を留めて、亡き後までの義を勸む。かれは異國の良弼、これは我が朝の忠臣、時千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、ありがたかりし賢佐なり。」

—（太平記）—

二　行宮の秋霧

北畠親房

義貞朝臣は筑紫へ下りしが、播磨國に朝敵の黨類ありとて、まづこれを對治すべしとて、日を送りしほどに、五月にもなりぬ。高氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上る。官軍利なくして都に歸參せしほどに、同じき二十七日に又山門に臨幸し給ふ。八月に至るまで度々合戰ありしかど、官軍いと進まず。都には元弘の時の主上の御弟に、三の御子豐仁と申しけるを、位に即け奉る。十月十日の頃にや、主上山門より還幸、いと淺ましかりし

東宮　後醍醐天皇の第六皇子恒良親王、延元三年薨、御年十五。

實世　藤原氏、正平十三年歿、年五十一。

成良親王　後醍醐天皇の第七皇子、延元三年薨、御年未詳。

内侍所　奇特

事どもなれど、なほ行末を思召す道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣を始として、さるべき兵もあまた仕うまつりけり。主上は尊號の儀にてましまし。御心を休め奉らんためにや、成良親王を東宮にすゑ奉る。

後醍醐天皇御宸影

同じき十二月に忍びて都を出でましまして、河内國に正成といひしが一族等を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふ。本の如く在位の儀にてぞましまし、内侍所も遷らせ給ひ、神璽も御身にしたがへ給ひけり。誠に奇特の事にこそ侍りしか。吉野の行幸に先だちて、義兵を

又の年　延元三年。

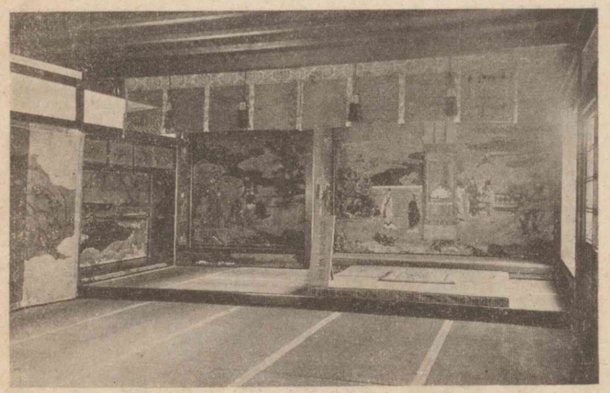
顯家卿　北畠親房の長子、延元三年歿、年二十一。

親王　義良親王、後に即位せられて後村上天皇と申し上ぐ。

石津　今の堺市の南。

苔の下に……　「もろともに苔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を見るぞ悲しき」（金葉集、和泉式部が娘小式部を悼みし歌）

おこす輩も侍りき。臨幸の後には、國々にも御志ある類あまた聞えしかど、次の年も暮れぬ。



吉水神社玉座

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、又親王を先だて申し、重ねて打上る。海道の國々を悉く平げて、伊勢・伊賀を經て大和に入り、奈良の京になんつきにける。それより所々の合戰あまた度、互に勝負侍りしに、同じき五月和泉國石津といふ所にての戰に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極まり侍りにき。苔の下にも埋れぬものとては、唯徒らに名をのみを留めてし。心うき世にも侍るかな。

男山　京都府綴喜郡木津川南岸、石清水八幡宮鎭座の山。

させる事なくて　延元三年閏七月、義貞の福井縣藤島にて戰死せしをいふ。

いふばかりなし

陸奥の皇子　義良親王。

顯信　親房の第二子、天授六年歿、年未詳。

節度

親王　義良親王。

儲の君　異母の御兄宗良親王等をさす。

官軍なほ心を勵まして、男山に陣をとりて、暫く合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も、度々召されしかど上りあへず。させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめ給ふべき定あり。左少將顯信朝臣中將に轉じ從三位に敍し、陸奥介鎭守府將軍を兼ねて遣さる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申しきかせ給ふ。「道のほどもかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。」となん申されし。異母の御兄もあまたましまし。同母の御兄も、前東宮恒良親王、成良親王ましましに、かく定り給ひぬるも、天命なればかたじけなし。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、

伊豆の崎　伊豆半島の最南端の一角、一名石廊崎。

伊勢の海……　愛知縣知多郡の篠島につきしをいふ。

東國をさして…　北畠親房の乘船のこと。

內の海　茨城縣東條の浦。

後に……　延元四年三月立太子、同八月即位、後村上天皇と申し上ぐ。

御船のよそほひし、九月の初、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船行方知らず侍りけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風のまぎれに、東國をさして常陸國なる內の海につきたる船侍りき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹きわけらる。末の世には、めづらかなるためしにぞ侍るべき。儲の君に定らせ給ひて、例なきひなの御住居もいかがと覺えしに、皇大神の留め申させ給ひけるなるべし。後に吉野へ入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひあはせられて、尊くも侍るかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵強くなりぬ。

戊寅の年
延元三年。

八月
延元四年。
寢るがうちに……
「ぬるがうちに見るものみやは夢といはんはかなき世をもうつゝとは見ず」（古今集、壬生忠岑）

仲尼
孔子の字。

獲麟に……
「魯の哀公十有四年春、西に狩して麟を獲す。」（春秋）

親王
皇太子義良親王。

左大臣
藤原經忠、正平七年歿、年五十一。

さても舊都には、戊寅の年の冬、改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひ思ひの年號なり。唐にはかゝるためし多けれど、この國には例なし。されど四年にもなりぬるにや。大日本島根はもとよりの皇都なり、内侍所、神璽も、吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に侵されさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。寢るがうちなる夢の世、今に始めぬならひとは知りながら、かずかず目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたく侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申し述べて、素意の末をも顯さまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。

かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第へ移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰せのまゝにて後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふ事二十一年、五十二歳おましましき。

—（神皇正統記）—

神皇正統記
北畠親房の著、神代より、後村上天皇御即位に至るまでの歴史を説きて我が國體を闡明し、併せて作者の歴史觀を述ぶ。

安部野
大阪市西成區より住吉區にかけての低丘陵地域一帶。

霜月二十六日
正平二年。

渡邊の橋
もと、淀河口の支流に架れる橋、天滿・天神兩橋の間に在りしといふ。

色代

三　如意輪堂

安部野の合戰は、霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋より堰落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を煖め、藥を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物具失へる人には物具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後心を通ぜん事を思ひ、その恩を報ぜんとする

四條縄手　大阪府北河内郡にあり。
今年兩度の合戰　正平二年八月藤井寺に於ける細川顯氏との合戰及び、十一月安部野に於ける山名時氏との合戰をさす。
將軍　足利尊氏。
左兵衛督　足利直義をさす。
十二月十四日　正平二年。
淀　京都府久世郡淀町。

人は、やがて彼の手に屬して、後、四條縄手の合戰に討死をぞしける。

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵しうばはれ、遠國又蜂起しぬと告げければ、將軍・左兵衛督の周章、唯熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。軍勢の手分事定つて、未だ一日も過ぎざるに、越後守師泰は手勢三千餘騎を率ゐて、十二月十四日の早旦にまづ淀に著く。これを聞いて馳加はる人々には、武田甲斐守・逸見孫六入道・長井丹後入道・厚東駿河守・宇都宮三河入道・赤松信濃守・小早川備後守、都合その勢二萬餘騎、淀・羽束師・赤井・大渡の在家に居餘つて、堂舍佛閣に充ち滿ちたり。同じき二十五日、

八幡　京都府綴喜郡八幡町。
隆資　藤原氏、正平七年歿、年六十。
先朝　後醍醐天皇。
厄弱　危きを見て
「士は危きを見て命を致し、得を見て義を思ふ。」（論語）
扶持
武略
有待の身

武藏守手勢七千餘騎を率ゐて八幡に著く。

京勢雲霞の如く淀・八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、『父正成、厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命をいたす處、かねて思ひさだめ候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷りなり候ひしを、合戰の場へは伴なはで河内へ歸し、死殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に卽けまゐらせよ。』と申し置きて死にて候。然るに、正行・正時すでに壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戰仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふにまかせぬなら

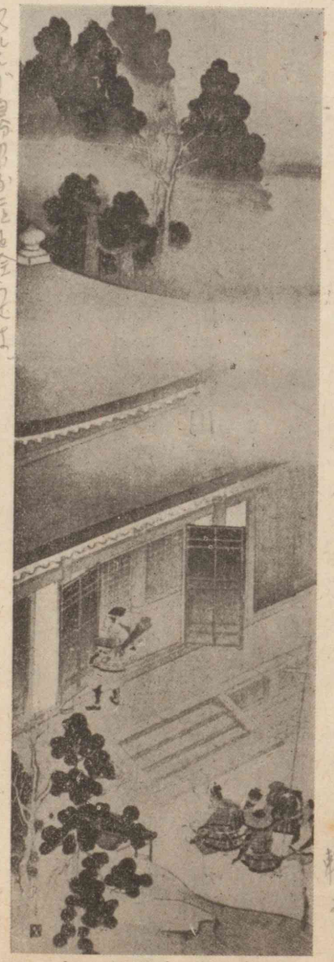
傳奏

主上　後村上天皇。
南殿　紫宸殿のこと。

ひにて、病に冒され、早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰に駈合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候ふか、正行・正時が首を彼等に取られ候ふか、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らんために參内仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上、即ち南殿の御簾を高く卷かせて、龍顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功、返す返すも神妙なり。大敵、今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、唯これを最後の參内なりと思ひさだめて退出す。

股肱



如意輪堂（伊藤龍涯筆）

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞・同じき紀六左衞門・子息二人・

先皇　後醍醐天皇。
如意輪堂　奈良縣吉野山中、藏王堂の東北にあり。
過去帳
逆修

野田四郎・子息二人・楠木將監・西河子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先*皇の御廟に參つて、今度の軍、難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如*意輪堂の壁板に、各〻名字を過去帳に書連ねて、その奥に、

歸らじとかねて思へば梓弓なきかずにいる名をぞ

とゞむる

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各〻鬢髮を切つて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へとぞ向ひける。—（太平記）—

改制 女子國文新讀本　卷五　終

常用漢字表

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】之久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交京亭亦【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便係促俱俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑傭催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億

檢償優【儿】元兄充兆兇先光克兌免兒【入】入內全兩【八】八公六共兵具其典兼【冂】冊再【冖】冗【冫】冬冷凉准凌凍【几】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑【力】力功加劣助努效勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】包【匕】化北【匚】區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵

卷卽【厂】厄厘厚原厥【厶】去參【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執埰基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓墜增墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】

夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠娼婚婦婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尙【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峠峯島
峽崇崎崩【巛】川州巡巢
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幺】幻幼幾
【广】床序底店府度座庫
庭庶康廉鄭廢廣廳【廴】
延廷建廻【廾】弄弊【弋】
式【弓】弓弔引弟弱張强
彈【彡】形彩彫影彰【彳】
役彼往征待律後徐徑徒
得從御復微徵德徹【心】
心必忌忍志忘忙忠快念
怒思怠急性怨怪怯恐恥
恨恩恭息悔悟悖患悲惟
悼情惑惜惠惡惰惱想愁
愉意愚愛感慈態慕慘慢
慎慣慨慮慰慶慾憂憐憚
憲憶憾憤憂應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】
戶戻房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛採探
控推揚接提換握挿揭揮
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故敍敎
敏救敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】
斤斥斬新斷斯【方】方施
旋旅族旗【无】既【日】日
旦旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晩晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【曰】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔査柩柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機横檄檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌歎歐歡
【止】止正此步歩歳歴歸
【歹】死殊殉殖殘【殳】段
殺殿毀【毋】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑涙淡淨淫深混清淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漠漢
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熱熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獻獸【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘甚
【生】生產甥【甲】甲田
田由甲申男町界畏畑畜
畝略番畫異留當疊【疋】
疋疎疑【疒】疫疲疾病症
痘痛痢療癖【癶】登發
【白】白百的皆皇【皮】皮
【皿】皿盆益盛盜盟盡監
盤【目】目盲直相省眉看
眞眠眼着睡督【矢】矢知
短【石】石砂砲破研硬硯
碁碎碑確磁磨礎【示】示
社祈祕祖祝神票祭禁禍
福禦禮【禾】秀私秋科秒
租稀移税程稚種稱稲稿
穀積穂穩【穴】穴究空突
窃窒窓窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛符第筆
等筋筒答策算管箱節範
築篤簡簿籍【米】米粉粒
粘粗粹精糖糞【糸】系紀
約紅紋納純紙級紛素紡
索紫累細紳紹紺終組結
絶絡給統絲絹經綠維網
綱綴綻綿緊緒線締緣編
緩緯練縛縣縫縮縱總績
繁織繕繪繭繰繼續【缶】
缺【网】罪置署罰罵罷羅
【羊】羊美羣義【羽】羽翁
翌習翼【老】老考者【而】
耐【耒】耕【耳】耳聖聞聯
聲職聽【聿】肅肇【肉】肉
肖肝股肥肩育肺胃背胎
胞胴胸能脅脈脊脚脫腐
腕腦腰腸腹膚膜膝膽臆
膺臟【臣】臣臥臨【自】自
臭【至】至致臺【臼】與興
舉舊【舌】舌舍【舛】舞
【舟】舟航般舵舶船艦
【艮】良【色】色【艸】芝花
芽芳苑苗若苦英茂茶草
荒荷莊菊菌菓栄華萬落
葉著葬蒙蒸蓄蔓薄藏藝
藤藥【虍】虎虐處虛號
【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶
蠻【血】血衆【行】行術街
衝衡衛【衣】衣表袞袋袖
被裁裂裏裕補裝裸製複
褒襲【西】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託記
訟訪設許訴診詐詔評詞
詠試詩詰話詳誇誌認誓
誕誘語誠誤說課調談請
論諭諸諾謀謁諮講謝謠
謹謬證識譜警譯議護譽
讀變讓【谷】谷【豆】豆豐

【豕】豚象豪豫【貝】貝貞負財貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤賦質賴購贈贅【赤】赤【走】走赴起超越趣【足】足距跡路踊躍【身】身【車】車軌軍軒軟軸較載輕輩輪輯輸輿轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰農醜醫【釆】釋【里】里重野量【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄錢鍋銷鎮鏡鑄鐘鐵鑑鑛【長】長【門】門閉開閑問闇闘闘【阜】防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊階隔隙際障隣隨險隱【隹】隻雀雄雅集雇雌雙雜離難【雨】雨雪雲零雷電需震霜霧露靈【青】青靜【非】非【面】面【革】革靴【音】音響【頁】頂項順頓預頑領頭頻題額顏願顚類顧顯【風】風【飛】飛飜【食】食飢飲飯飾養餓餘餅館餐【首】首【香】香【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒驅驗驚驛【骨】骨髓體【高】高【髟】髮【鬥】鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥【麻】麻【黃】黃【黑】黑默黙黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】齊【齒】齒齡【龍】龍【龜】龜

昭和十二年六月一日改制版印刷
昭和十二年六月五日改制版發行
昭和十二年十二月十四日訂正再版印刷
昭和十二年十二月十八日訂正再版發行

四年制用

定價	
卷一—四	各金六拾錢
卷五—八	各金五拾八錢

改制 女子國文新讀本

著作權所有

編者　千田憲
發行者　東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地　塚田六彌
印刷者　東京市板橋區志村町五番地　河合勝夫
印刷所　凸版印刷株式會社板橋工場

發行所　東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地　右文書院
電話駒込(82)二五八〇番
振替東京七四五二八番

大賣捌　東京　林平書店　大阪　柳原書店　名古屋　敎生社　久留米　金文堂

四ノ一

伊藤妙子

篁文館